
異世界はゲームのようだった

大豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界はゲームのようだった

【Nコード】

N2819Y

【作者名】

大豆

【あらすじ】

「ちよつと難易度高すぎじゃないか？」目覚めると、ゲームのよ
うな世界にいた。状況がつかめないまま一人で頑張ってるんだが、
敵が強すぎていやになる。何回殺されるんだよ。痛すぎ。こんな
無理ゲーじゃねえか！……ん？ スキルっていうのがあるの……
？ ※割と主人公がボロボロになる話です。血液がたまくるのでそ
ういうのが苦手な方は注意。

第一話 扉に寄り添う牛男（前書き）

楽しんでいただけたら幸いです。

第一話 扉に寄り添う牛男

『セーブされました。「ステージ1」を開始します。目的…森林地帯からの脱出』

目が覚めた。

ミズオは良い気分で目を開ける。

近年稀にない爽快な目覚めで、即座に走りだせそうなほど体に力がみなぎっている。

はて、昨日何かしたのだろうかと自分の腕を見たが、寝巻代わりのスリムなジャージに包まれた自分の腕があるだけだった。

爽快な気分そのままに、ミズオは勢い良く上半身を起こし、両腕を上げて背筋を伸ばし————そして気付いた。

(ここ……どこだ……?)

目の前に広がるのは、ログハウス風の小屋。乾燥した木の匂いが清々しい。

ミズオの知らない場所だった。

ミズオのいる小屋の中は小さな天窓から日が差し込んできているため割と明るい。

部屋に仕切りはなく、正方形の床は一辺がミズオを縦に二人並べたくらいの長さである。3メートルほどの高さに梁が渡っており、二階は無い。

内側から見た感じ、屋根は切妻造りのようだった。扉は一つだけ。

壁に窓はない上に物も少なく殺風景である。板が敷き詰められた床の上に備え付けられているのは、ミズオが寝ていた薄い敷き布団が敷いてある寝台と、洋式便器だけであった。

洋式便器はどこからか水を引いているのか、後ろの壁にあるレバーをひねると水が流れた。

「いやトイレだけあっても……」

便器を洗淨する水の音を背景に部屋を見渡してみたが、便器と寝台以外何もない。布団もないし、尻を拭く紙すらない。

寝台の下も探してみたが、本当に何もなかった。

「ホントここどこだよ……」

寝床とトイレだけの窓のない部屋。牢屋と言われれば納得しそう

だが、牢屋に水洗トイレを備え付けるだろうか。ホコリ一つ落ちていないのも不自然だ。

ミズオは困惑し、呆然とし、うろうろと歩き回ってから、一つ彼の行っていない場所を見てみることにした。

扉の先である。

外界へと繋がる唯一の道。

扉は黒光りする鋼鉄製で、シリンダー錠が8個縦にずらっと付いていた。幸い内側からであれば、鍵がなくとも開くようになっていく。

ここまで嚴重にする意味が分からず、不安になって保留していたのだが、他に探す場所もないので開けてみることにしたのだ。

カチリカチリと上から順につまみをひねって錠を外していく。なぜか緊張した。自分の呼吸音がやけにうるさい。

最後の一つをゆっくりとひねり、がちゃ、と扉のロックが外れた音がした。

ごくりと唾を飲み込み、そろそろと扉を開ける。

途端、ぬっと手が差し込まれる。獣の匂い。巨大な、ミズオの3倍はある毛むくじゃらの手であった。

その手が扉を押し広げ、ドアノブを握っていたミズオは部屋の外へと引っ張り出されることとなった。

（森…？）

部屋の外は緑一色であった。草木の萌える匂いがする。木々が艶やかな葉を茂らせていた。

しかしミズオにそれらを観察している余裕はなかった。
扉のすぐそばに立っていた人影の大きな足に、蹴倒されていたか
らである。

「ぐえ」

腹の上に置かれた大きな足が、内臓を圧迫する。

肺から空気を押しだされ間拔けな声が出た。ミズオを踏んだのは、
大きな斧を振りかぶる牛の頭の大男であった。

背丈2メートル半を超すような筋骨隆々の人物である。斧を振り
上げると、両脇の下に広背筋が広がった。そのまま見ていると、斧
が頂点で静止する。ミズオは何も考えることができない。

思考が完全に止まっている。牛男が鼻息を吹き、両腕に力を入れ
るのが分かった。

（あ—————）

振り下ろされた斧がミズオの頭蓋を破壊する。

—————ぐちゃ。

目が覚めた。
同時にミズオは跳ね起きる。
体中から嫌な汗が噴き出した。

「はっ、はっ、はっ、はっ………！」

喘ぐように息を吸い、頭を触る。良かった。ちゃんとある。割れていない。

（嫌な夢を見————）

汗を拭いつつ顔を上げたミズオが見たのは、先ほどと同じログハウス風の部屋だった。洋式便器もある。

「なんだよ、何だよコレ！」

現実なのか夢なのか分からなくなった。とにかく怖い。体が勝手に震え出す。

（そんな、どうして………！）

混乱し、頭をかきむしる。
先ほどの夢は夢ではなかったのか？
正夢？
まだ夢を見ているのか？
わからない。わからない。

「そ、そうだ、もう一度見てみれば……」

扉にはカギがかかっていた。やはりさっきのは夢だったのだろうか。そうであればいい。確かめなければ、とても正気ではいられない。

震える手で錠を外し、扉を開けてみる。そうっと、指の入らないほど薄く。

糸のように細く見える外界の光景には、残念なことに牛男の姿があった。獣の匂いが薄く開いた扉から忍び込み、ミズオの鼻孔を刺激する。

牛男はギョロリと瞳を動かした。牛の瞳は大きい。

(……………ッッ！)

目が合った。牛男はじいっと、こちらを見おろした。

声を出せば気付かれると思い、ミズオは必死に口を手で覆った。呼吸すら押さえつけるつもりで全力で押さえつけた。

だが、そんなことは関係がなかった。目があったのだから。

フスッと牛男が鼻息を吐いたようだった。

牛男は両手で斧を振り上げ、扉と外壁の狭い隙間へとねじ込むように振り下ろす。

—————キイイイイイ……………ぐしゃ。

扉との接触で甲高い音をたてながら落ちてくる鋼鉄の刃が、ミズオの頭をかち割った。

目が覚めた。

「――――ッ！」

声にならない悲鳴を上げてミズオは跳び起きる。

頭はちゃんとある。しかし、先ほどの光景が頭に焼き付いて離れない。狂いそうだ。

胃の中のものを吐きだそうとして、しかし何も出てこなかった。嗚咽を繰り返す。

ふと周りを見渡せば先ほどと同じ部屋である。

慌てて、扉の錠を見る。閉まっていることを確認し、安堵の息を吐きつつその場に崩れ落ちた。先ほど脳髓をぶちまけたであろう場所には、一滴の血痕もない。

やはり夢だったのか。それにしても性質の悪い――――

（ん……？）

ふと視線を移した先、左の手首に直径一センチくらいの青黒い珠が埋め込まれていた。

「うわ、気持ち悪……！」

一見ヒルが張り付いているように見えて、慌てて指で引っかき外そうとすると、珠は赤く強烈に発光した。

「うおっ！」

思わず目をつぶったミズオが目を開けると、空中に青く透き通った画面が出現していた。非現実的な、空間投影されたパソコンの画面のようだ。

同時に音声流れる。音声の内容と同じ物が空中の画面に表示された。

『指紋の照合によりプレイヤー…ミズオと確認しました。ウィンドウを展開します。以後、このメッセージは省略されますのでご了承ください』

新たに画面が出現し、空中に静止したそれにずらずらと文字が並んでいく。

ミズオは混乱しつつ、その文字を目で追った。

プレイヤー…奥住瑞夫(21)

3回目00…08…23／合計01…42…19

ステージ1…森林地帯からの脱出

一スキル 「0／2」

＋装備スキル

一ポイント…15 p

＋スキル強化

＋スキルスロット増加

＋情報の取得

＋支援物資の取得

＋その他

－情報の閲覧

＋ポイントで取得した情報

＋魔王軍兵士の情報

－ヘルプ

＋ゲームの目的

＋ルール

＋クリア特典

＋スキルについて

＋ポイントについて

＋その他

（ゲーム……？）

一番上に、ミズオの名前がある。

表示されている時間は刻々と時を刻んでいた。

「魔王……軍」

ゲーム、魔王軍、など実生活ではあまりなじみのない単語が目に見え、ミズオは眉根を寄せる。

（さっきの牛男は……魔王軍……？）

画面に指で触れるとわずかに反動がある。空中に投影しているだけでなく、実体すら持っているようだ。専門ではないので知らない

が、オーバーテクノロジーではないだろうか。

深く考えないようにしつつ、画面の「+」に触れると、新たにツリーが展開される。

「装備スキル」の「+」に触れると、「+」は「-」へと変わり、すぐ下の行に割り込むように「・なし」という項目が表示された。操作は分かった。

「ヘルプ」のツリーを読めば、この状況が少しは分かるかもしれない。

ミズオは座りなおすと、画面のヘルプにタッチした。

ーヘルプ

ーゲームの目的

- ・このゲームは大魔王を倒すことを目的としています。
- ・大魔王のいる場所は不明ですが大陸の西方にしていると推察されています。

ーゲームのルール

- ・このゲームでの死亡は、擬似的なものです。
- ・このゲームにおいてプレイヤーは死ぬたびに最後のセーブ場所へと精神だけを逆行します（以後この現象をリセットと定義しま

す)。

- ・セーブはセーブルームの寝台に初めて触れた時に起こります。一つのセーブルームでは一回しかセーブされません。

- ・リセット時に消費するポイントは5 pです。5 pが支払えない場合はリセットが起これずゲームオーバーとなり、プレイヤーの人格は消滅します(この状態が、一般的な死亡と言えます)。

ークリア特典

大魔王を殺害した場合に得られる特典です。

- ・元の生活場所・時間へ送還……0 p
- ・この世界での記憶を消去……10 p消費
- ・元の生活場所へスキルの持ち帰り……1つにつき100 p消費 (獲得したことのあるスキルのみ)
- ・死者の蘇生(プレイヤーが面会したことがある存在のみ) ……1000 p消費

ースキルについて

ースキルの使い方

- ・念じるだけで行使できます。

ースキルの獲得

- ・一定の条件を満たすことにより、超常的な技術・能力を得ることができます。

- ・獲得したことのあるスキルは、「スキルの履歴」の項目で獲得条件を確認できます。

ースキルの装備

- ・獲得したスキルは自動で装備されます。装備はスロットルの数だけ行えます。

- ・スロットルが一杯の場合、新たなスキルを装備するかどうか、またどのスキルを装備から外すか選択できます。

- ・一度装備状態から外したスキルはリセットするまで、例え

獲得する条件を満たしても再獲得することはできません。

ー スキルスロット

- ・ 初期状態では二つのスキルスロットがあります。
- ・ ポイントを10ポイント消費してスキルスロットを増加できます。

・ 上限はありませんが、リセットが起こった場合はセーブした時のスキルスロット数に戻ります。

ー ポイントについて

ー ポイントの獲得

- ・ 以下の時、ポイントを獲得できます。

＋24時間経過ごとに1p

ー 各ステージをクリアする。

- ・ このゲームにはステージごとに達成率が設定されており、クリアすると達成率に応じてボーナスポイントを獲得できます。

- ・ クリア自体のポイントは10pです。

＋魔王軍の兵を倒す。

ー その他

ー セーブルームについて

- ・ ゲームの拠点となる建物のことです。
- ・ 各ステージごとに一つ用意しており、初めて寝台に触れた時にセーブが起こります。

・ セーブが起こると、そのステージより前のセーブルームは破棄されます。

・ セーブもしくはリセットされてから72時間は「不壊」の概念が発動しているため、内部や外部から破壊することはできません。

＋情報報端末について

ープレイヤーについて

・お答えいただいたアンケートにてゲームをプレイしてみた
いと答えられた方の中から抽選でプレイヤーを決定いたしました。

「マジか……」

最後の部分に書いてある一文を読んで、ミズオは頭を抱えた。誰
がやったか知らないが趣味が悪すぎる。

時系列が合っているのかは分からないが、記憶では昨晚のことだ。
送信者不明のメールに、「異世界で冒険できたらしてみたい」と
いった項目にチェックして送り返した記憶がミズオにはあった。

———なんだこのメール？ ゲームのアンケート？ ふー
ん……。暇だし、やってみようかな。

軽い気持ちで、最後の方にあった「面白い体験ができるのなら死
んでもいい」みたいな項目にもYESと答えた覚えがある。

もちろん、こんなことになるなんて知っていればそもそもアンケート
に答えるなどしなかっただろうが———

（いや、本当にしなかったのかな……）

ちょっとした冒険心と好奇心で、チェックしてしまっていたかもしれない。

なにしろミズオにも、先の見えない現状を疎んじ、異世界での冒険に憧れる気持ちはあったのだ。

（……結局は俺のせいなのか？ いやいや、明らかにこのアンケートを送ったやつのせいだ。でも……）

良く分からなくなってきたので、整理することにした。

大前提として、大魔王とやらを殺さないと日本には帰れない。

帰らなくてもいいというスタンスであれば、一日に1ポイントを時間経過で得ることができるので、生きるだけならできるかもしれない。

しかし、それはこのセーブルームが安全である、という前提があってこそだ。この説明を信じるなら今は大丈夫だが、72時間後にはただの木の小屋になるのだろう。

木の壁が牛男の持つ斧の攻撃に耐えられるとは思えない。72時間後には確実に破られるだろうし、それまでミズオの精神が持つかどうか。現状、ゲームに乗らないという選択肢は選べそうにない。

また、ヘルプの説明を読むと、生き帰るのに必要なポイントは5ポイントで、現在ミズオのポイントは15ポイントである。

最低でもあと三回は生き返ることができるが、逆に言えば、何もしなければ四回死ねば終わりということだ。

死なないためには、何としてもポイントを稼がなければならない。そして、ミズオは死にたくなかった。

ミズオはこのゲームに乗ることを決めた。

（何をしようか。いや、何をすべきだろうか。考えろ。考えろ……）

不思議と頭は冷静だった。

強烈な死亡体験のために狂ったのかもしれない。理由は気にしないことにした。

腹を決めたことで向き合う準備ができたのか、牛男の顔を思い出し、心はそれほど揺れなかった。

（まずはよく知ることだ）

ミズオは一つ息を吐き、より詳しくこのゲームについて調べるため、空中に浮かんでいる画面に指を這わせるのだった。

第一話 扉に寄り添う牛男（後書き）

苦情1. セーブルームから出たら即座に殺されるのはどうしてですか。ありえない不是吗。

A. 不用意に開けるあなたが悪いです。

第二話 ランダム要素がマジキチ（前書き）

何も考えてないのですが、ここは考えた方がいいんじゃないかという指摘は歓迎しております。

第二話 ランダム要素がマジキチ

途中から音声で動かせることが分かり、ベッドに寝転んでダラダラと読みふけた。

このゲームでキーとなるのは、「スキル」と「ポイントの使い方」だ。それが、この手首に埋め込まれた珠、すなわち情報端末から飛びだしているウインドウを操り、読んでみて分かったことだ。

スキルとは、超常の能力や技能であるらしい。

スキルを獲得するためには条件を満たす必要があり、ポイントを消費することでその条件を手に入れることができる。

だが条件を得られるスキルはランダムで決まる。現在でも取得できるものを選ばれるらしいが、さて。

—情報の取得

—スキル獲得条件に関する情報……3p

- ・スキルの獲得条件を取得できます。
- ・この情報は情報端末には記憶されません。
- ・獲得条件を取得できるスキルは、現在のプレイヤーが獲得できるものからランダムで選ばれます。

・取得できる情報にスキルの名称は含まれていません。プレイヤー自身で確かめてください。

(3ポイント……か)

ミズオの残りポイントは残り15ポイントである。24時間じつとしていれば1ポイント増えて16ポイントになるが、それまで待つのも嫌である。

ポイントをすべて使えば5つのスキルの情報を得られるが、そんな刹那的な選択をすることはできなかった。

ポイントで得られるものは情報だけではないのだ。その中には、生きていく上で必要なものがある。

中にはポイントで得ずとも小屋の外にはある物もあるだろう。しかし、今のままでは一歩踏み出す前に首が飛んで－5ポイントである。

慎重に行動する必要がある。

(と言っても、これはやりくりの苦勞しそうだ……)

生きていく上で必要な食糧などは今ミズオのいる小屋、すなわちセーブルームでしか受け取れないようだ。

一 支援物資の取得

- ・ポイント消費し、物質を取得できます。
- ・この項目はセーブルームでのみ選択可能です。

一 食糧

- ・一日分の食糧と水……1 p
ランダム
- ・一食分の定食と飲み物……1 p
ランダム
- ・内服薬と認められるもの……5 p
- ・究極の一品……10 p
ランダム
- ・至高のメニュー（ランダム）……30 p

一 消耗品

- ・水溶性ティッシュ五箱……1 p
- ・消耗品と認められるもの……3 p

十 インテリア

一 武装

一 兵士セット……2 p

- ・剣や弓などの武器、盾や兜などの防具からそれぞれ一つ。
- ・品質のグレードは低級です。

一 超科学武装……50 p

- ・地球の21世紀の科学レベルを超越する機構を備えた武

装。

一 概念武装……100 p

- ・何らかの概念が込められた強力な武装。

とりあえず、尻を拭く紙が1ポイントで得られることに安堵する。
緊急の時は頼りにさせてもらおう。

ティッシュとはいえ水溶性なら、詰まることもないはずだ。

（他に何が必要になるか分からない……スキルの情報に消費するのは二回までにしよう）

それならば9ポイント残る。食糧や武装を手に入れても、一回リセットをすることが可能だ。

そう決めてミズオは画面を操作し、「スキル獲得条件の情報」をトントンと叩く。

ポーンと言う音がした。

『3ポイントを消費して、スキル獲得の条件を取得しますか？
Yes／No』

新たなウィンドウが立ち上がり、選択の確認をしてくる。

一回で習得できそうなスキルの条件が出ることを願いつつ「Yes」をつつくと、さらにもう一枚画面が表示された。

『スキルNo. 39の獲得条件…【致命的な一撃を素手で受け止める】このウィンドウはあと29秒で閉じられます。このメッセージは次回以降省略されます』

「す、素手!？」

致命的な一撃と言えば、さっきの牛男の斧の一撃だろう。

両手を突き出しても、腕の骨ごと叩き切られるシーンしか想像できない。それを受け止めるという状態に当てはめるのは無理がある。多分死ぬだろうし。

「無理だろ……………」

可能性としては、極限の集中力と火事場の馬鹿力を発揮すれば可能かも知れない。しかし、試してみるまでもなく無理である。

期待が大きかっただけに裏切られた感じが否めない。さっそく3ポイントを無駄にした気分だ。

（クソ、3ポイントあれば武器と防具と飯が手に入るんだぞ…………ッ！）

何に怒ればいいのやら、とやきもきしていると、時間経過によりスキルの獲得条件を表示していた画面が閉じてしまった。

ふうふうと息を吐き、気を落ちつける。

（いやいや、予定通り。予定通りき。この時のために二回使うつもりだったんだ。この状況は予測していたので全く悔しくない。流石ミズオ君、考えることがイケメンだ。格好いいぜ！）

自画自賛して精神の安定を図りつつ、気を取り直して、もう一度「スキル獲得条件の情報」に触れる。今度は大丈夫そうな条件が出てくれと祈りながら。

————ポーン！

『スキルNo. 38の獲得条件【致命的な一撃を体に掠らせつつ回避し、一秒以内に反撃を当てる】』

「またか…！ またこんなのかよ…！！」

ミズオは悔しさに床をたたいた。手が痛かった。

違うのだ、こういう生と死の狭間でしか得られないスキルが欲しい訳ではないのだ。

もっと簡単かつ安全に取れるスキルはないのか。腹筋を1000回するとか、そういう厳しめのでいいから。

いや、もしかして、死を覚悟しないと得られないようなスキルしかないのかもしれない。

なぜならこのゲームは、ルールやポイントの制度からみて、プレイヤーが傷つくことや死ぬことを前提としているとしか思えないからだ。

ミズオが気がついたときはすでに15ポイントになっていたポイントも、初期状態では25ポイントと多く支給されている。つまり5回も死亡可能だ。

そして、今まで見ていなかった「ポイント」の「その他」の中に「修理」という怪我などを治せる項目があるのだが…：必要なポイントがとても少ないのだ。

－その他

－修理

・代謝の活性化による治療…：1 p

- ・生体部位破損・欠損の修復・復元……2 p
- ・体調不良の快癒……1 p
- ・その他の修理・整備……2 p

もう、ケガをしてくださいと言わんばかりの安さである。

しかしミズオはケガをしたくない。痛いのは普通に嫌いである。というわけで易きに流れることにした。すなわち、ポイントのさ
らなる消費である。

「もう一回。もう一回だけ」

そう呟きながらミズオは祈るような気持ちで「スキル獲得条件の
情報」を叩く。

『3ポイントを消費して、スキル獲得の条件を取得しますか？』
「イエスです！」

頼れるものはもうこれしかない。そう思ったミズオの意思は音を
立てて折れそうになった。

『スキルN O. 39の獲得条件…【致命的な一撃を素手で受け止め
る】』

「あ、あれ、これさっきも……？」

かぶった。条件が被った。

「まあ、人生色々…だもんね……………」

泣きそうになるほど凹みまくったミズオだったが、流石にこれ以上ポイントを使うことはできない。

寝台に腰かけ、ぼう、と虚空を眺めつつ、コリコリと飴もどきを齧る。

空腹になったため、残る6ポイントのうち1ポイントを消費して「1日分の食糧と水^{ランダム}」を得たのだ。飴モドキはタンパク質の塊らしい。少し甘くて食べやすい。

空中からこれが現れた時、ミズオは肌でファンタジーを感じ取ったが、まあだからと言ってどうということもない。

残り5ポイント。

このまま無為に消費しつくしてしまうには、キリの良すぎる数字である。

しかし死に行くことも勘弁してもらいたい。

「そうだ、腹筋してたらスキルが出るかもしれないな。うん、ダメ

元さ。所詮そうさ…」

『スキル獲得条件を満たしました』

「で、出たああああああああッ！ おっしやあああああああ！
なんだよ！ 別にポイント払って情報見なくて良いんじゃない
ん！ このヤロー！ ハハハッ！」

スキル獲得を知らせる音声に、ミズオは狂喜した。腹筋がねじ切れそうになるまでやったかいがあった。嘘だ。30回しかしてない。それでも苦しかったが。

しかしスキルは得られた。音声がつらつらと語る。

『新たなスキルの情報が「スキルの履歴」に登録されます』

『スキルNO.55「鋼鉄の腹筋」を獲得しました』

『「鋼鉄の腹筋」…腹筋を鋼鉄のように固くできる。その腹筋は銃弾をも跳ね返す』

『スキルスロットに「鋼鉄の腹筋」を装備しました』

「お、おお……」

脳裏で、ガシーン！ と隙間に硬い物が嵌る感覚がして、もはや使い慣れた技術のように、腹筋を固くできるようになっていた。不思議な感覚だった。これがスキルを装備するということなのか。

しかも嬉しいことはそれではなかった。

『初めてスキルN.O. 55を獲得したため、スキル獲得ボーナスとして、筋力が一段階強化されます』

むきき、と体の筋肉が盛り上がった。少し出っ張りかけていた下腹が、脂肪はそのままに内側から筋肉で持ち上げられた。

「こ、これは……！」

やあ、懐かしの細マッチョじゃないか！

学生時代にボクシングをしていたミズオの体は今はダルダルだが、昔は引き締まっていたのだ。懐かしの凛々しい体である。ミズオのテンションはウナギ登りであった。

「よし、もう一個！ もう一個だ！ ぬおおお！」

今度は腕立てをしてみた。筋力が強化されているので、100回までは鼻歌交じりにできた。昔と同じくらいの筋力となっていて、ミズオのテンションはさらに上がる。そして。

『スキル獲得条件を満たしました』

「どうだオラあああああああ！ ウヒョーーーーーッ！ 何が来た！？ ねえ何が来たあ！？」

テンションが高くてウザすぎるミズオに、音声は淡々と告げた。

『スキルNo. 119 「電磁張り手」を獲得し、装備しました』 『初めてスキルNo. 119を獲得したため、スキル獲得ボーナスとして筋力が一段階強化されます』

「電磁…！？」

メリメリ、と服の内側の筋肉が盛り上がる。腹筋は盛り上がって

8個になり、胸筋が盛り上がって、肩筋が盛り上がって、とにかく色々盛り上がって、やべえ、真正正銘のマツチヨさんじゃないですか。

「実は幼き頃よりシュワルツェネッガーに憧れていたわけですよ……フンヌ！」

一通りポーシングによる筋肉のうねりを感じて満足してから、ミズオは張り手を試してみることにした。

電磁張り手って、名前からして凄そうなので期待が天元突破しそ
うだ。

やり方は分かっている。右ストレートというよりは、右正拳突きに近い構えだ。

腰を落として、体を半身にし、手を腰だめに。ふう、と息を吐く。

「——シッ！」

歯の隙間から履き出す息吹と共に、腰だめに構えた手のひらを打ち出す。

瞬間、腕の筋肉が震えるのが分かった。それは激しく、まるで発電するように。実際電気が発生した。

————ボッ！

空気の壁を抜くような恐ろしい速度で掌が打ち出される。腕を螺旋に駆けあがった電流が、掌に収束して、腕が伸びると同時に射出された。

小屋の壁に当たって弾ける電流の束を見つつ、ミズオは頬を引きつらせた。

「凄い威力だけど……。つ、疲れるなこれは……。うう……」

右腕が痙攣していた。指を動かそうとするだけで痛みが走る。強烈な筋肉痛だ。筋力が二段階上がってこれだ。多用するのは難しそうだ。

また右腕だけではなく、肩や腰や首筋、足の指の付け根など、いろんな所が痛い。

「とりあえず、寝よう。疲れすぎ……」

ミズオは寝ることにした。休息を取って、明日がんばろう。

目覚めは良かった。

10時間くらい寝てしまったが、体が欲していたということだろう。筋肉痛はわずかに残っていたがこの程度なら問題ないはずだ。腹の脂肪はなくなっていた。素晴らしい。

ポイントはポイント増えて6ポイント。でもウンコをしたのでティッシュを得るために一ポイント使って結局5ポイントだ。

昨日残して置いた食糧を食べ、簡単なストレッチをして、準備は整った。

「よし、行くか。一回なら死ねる」

ミズオは呟き、立ち上がった。生き返るのに5ポイント必要だ。もし死んでしまおうとしても、何か掴まなければ。

牛男に勝つ作戦は考えていた。

扉の側に立っている牛男は今のミズオより筋肉が凄いいし、5ミリしか開いていなかった扉の隙間に斧を打ち込む技量もある。

だが、限定的な状況を作ること、先手を取れるかもしれない。たとえば2回目の死の状況のように、斧が来る方向が分かっていたらあるいは。

「張り手を食らわせてやる……！」

ミズオはミシミシと拳を軋ませる。

それは作戦というには穴が多く、命を預けるには頼りないものだった。だが、ミズオはここで怖気付けば、もう立ち向かうことはできないと思った。

確かに今持っている以上の有用なスキルを得るために行動するのはありだと思う。しかし自分に逃げ場を与えてしまうと、際限なく自分は逃げ続けるだろう。どんなスキルがあれば良いのか思いつかない以上、今が一番、キリがいい。

（大丈夫、電磁張り手があれば勝てるはずだ。いや、勝つ）

ミズオは深く息を吸い、吐き出した。

かつてボクシングの試合の度に感じた緊張と高揚が、体の内から湧き上がってくるようだった。

第二話 ランダム要素がマジキチ（後書き）

苦情2. スキル情報が被るってどういうことですか。

A. 怒らないでください。ランダムなので時々は被りますよ。

第三話 反動がやばい

ミズオは作戦を決行することにした。

カチリカチリと筋肉で少し太くなった指で、シリンダー錠を開けていく。

汗が顎を伝う。緊張していた。極度の緊張は足に震えをもたらせ、疲労させる。緊張しないわけがなかった。二度も殺されているのだ。ミズオは自分のすることを確認し、緊張を遠ざける。

（速攻だ。扉を蹴り開け、張り手を食らわせる）

口の中でやることを繰り返しながら、最後のシリンダー錠のつまみに手をかける。

回そうとして、指が滑った。手汗だ。

おまけに指先が震えていた。

（クソ……！）

震える指先に過剰に力を入れることで、カチリと最後のシリンダー錠が外れた。

心臓の音が煩い。ああ、喉が渴く。

（そ、そうだ、まずは先に水を飲もう。それから――――）

緊張に耐えきれず踵を返そうとしたミズオの前で、ガチャリと彼が手をかけていないドアノブが勝手に回った。

その光景を、ミズオは理解できない。

「――は？」

次の瞬間、扉がいったいに引き開けられる。

ミズオの目に外の景色が飛び込む。

扉を開けた牛男。

それとは別に、もう一人の牛男が居た。大きく開かれた扉の外で、こちらを見て、斧を振りかぶろうとしている。

「――ッ！」

予想外の事態に思考が止まったミズオが後ろに跳びのけたのは奇跡に近い。

しかし振り下ろされた斧を完全には避けられなかった。目の前を通り過ぎる鋼鉄の刃の風。背筋を戦慄が駆けのぼる。ガツンと斧が床にぶつかる音がする。セーブルームの床も不壊だ。斧は弾かれ牛男の体が泳ぐ。

カッ！ と熱を感じた。左膝だ！ 一体どうした！ 感覚が――
――ない！？

（膝が！ 足が！ よくもこの牛ッッ！）

左ひざから下が、ゴボウを斜めに切るように切り落とされていた。血が吹き出る。

「ルッアッ！」

牛男が咆える。

痛い。左足に熱湯をぶちまけたかのような。斧が当たったのか。
チクシヨウ！　こんな足で張り手は打てるか？　大丈夫だ。右足さえあれば…！

「あああああああああ！」

目から鼻から痛みに液体を流しながら、ミズオはがむしやらにスキルを発動する。

倒れそうになる体の重心を落とし、右足の指が床を掴むように踏ん張った。腰の回転、体幹の回転。体の前面が肩を引っ張り、背筋が肩を押し出し、加速された肘が伸び、掌が押し出される。

———ボ。

空気を丸ごと押し出しように電磁張り手は放たれた。その風圧で一瞬動きを止めた牛男に、掌から放たれた雷撃が、襲いかかる。掌は届いていなかったが、電撃が牛男の頭を爆発させた。血と脳所が飛び散って、ミズオに降りかかる。

左足のないミズオは体の勢いを止めるストッパーを失ったようなものである。そのまま倒れるしかなかった。

脳裏で多数の音声と同時に流れたようだった。

『一般兵 ■■■兵』を倒しました。4pのポイントを取得しました』

『スキルの獲得条件を満たしました』
『新たなスキルが「スキル履歴」に登録されます』 『スキル獲得ボ

―ナスを得ました。動体視力が――

『スキルNo.38「カウンターアタック」を獲得しまし――

『「カウンターアタック」..攻撃の回避後1秒間に繰り出した攻撃へ補正がかかり、50口径拳銃から発射されたマグナム弾並みの――

『「カウンターアタック」を装備しますか?』

(なんだ、ごちゃごちゃ煩い。どうなった。牛男はまだいるのか?)

足から熱がどんどん流れ出ていつている。おまけに――

「ルオオオオオオオオオオオオオオオオ!」

怒り狂うもう一人の牛男の声が聞こえる。

(やばい:~!)

ミズオの体はうつぶせに倒れていた。体の下に倒した牛男の斧が挟まれている。もう一人の牛男が何をしているのか分からない。

しかし、裸足の青黒い足が近づいてくるのは見えていた。その足が、ズシン、と踏み込まれた。

――――攻撃が来る!

仰向けになるように転がる。上から斧が振り下ろされてくるところだった。

——ガァン！

真横に斧が振り下ろされ、落ちていた斧と当たって火花を散らす。ミズオは振り下ろされたばかりの牛男の斧を左手で掴んで体を引き上げた。

「————お前も食らえ！」

「ブモオオオオオ！」

電磁張り手が放たれる。ミズオの右腕に鈍い痛みが走った。骨が外れそうだ。肘から先が千切れて飛んでいきそうだった。

（こいつ、攻撃を逸らし——）

空振ったのだ。斧から放した牛男の手がミズオの腕をはね上げていた。電流があさつての方向に飛んでいく。

牛男がもう片方の手を離し、肘を引き、叩きつけてくる。一番殴りやすい場所——腹に。

ゴォン、とミズオの体が跳ねあがり、ぐしゃりと牛男の拳が碎けた。服が破けて覗いたミズオの腹は、鈍鉄色になっていた。「鋼鉄の腹筋」を発動したのだ。

（はは、マジで全然痛くねえ…！）

引きつる口で笑みを浮かべ、ミズオはもう一度右手を引いた。ギリギリと口を食いしぼる。顎の付け根でひびが入った音がする。

———電磁張り手ッ！

ビチ、と肘のあたりで何かが千切れた。筋肉が自ら発した電流で焼け、毛が逆立つ。放たれた右腕は自身を崩壊させつつ、牛男へと突き刺さる。限界を超えた筋力が自らの骨をたたき折り、骨がミズオの皮膚から突きだした。

——ゴポリ、と血が溢れだす。目から鼻から耳から口から。

掌底で胸を陥没させられ、浸透した電流でびくりと震えた牛男は、顔中の穴から血を流してミズオにのしかかるようにこと切れた。

静寂。

情報端末が戦いの終わりを静かに告げた。

『一般兵「■■■■兵」を倒しました。4pのポイントを取得しました』

「……はあっ…」

それを聞きながら、ミズオは這いずる。右腕は感覚が無くなった

し、左足はそもそもない。セーブルームに向かって必死に進む。ここでしか、体を直すことはできない。

(やばい………死ぬ………)

血液が欠損した左足から心臓の弱い鼓動に合わせて流れ出る。どうにか板張りの床へとたどり着く。

「……うあッ」

(声は出る…音声で操作できる情報端末に回復を頼むんだ。これ以上血が出ると死んでしまう。早く!)

「し、修理…欠損の…復元」

たったそれだけを言うだけで総力を使い果たしたようだった。目の前に透明な青色のウィンドウが現れる。

『2ポイントを消費し、「生体部位破損・欠損の修復・復元」を実行しますか? Yes/No』

「そう…だ!」

かすれた声を聞き取ってくれた情報端末が発光し、手が、足が、時間を逆巻きにするように修復していく。

出来上がった左足が、バチャリと血の池へと落ちた。

『四肢の修復が体に馴染むまであと5、4、3、2、1……シークエンスを終了しました』

力を込めると、右手の指先が動いた。目の前に持ってくると、ど

こもケガをしていない。

「動く……」

痛みという物体を指先から突っ込まれたような激しい瞬間を思い出し、身震いする。

しかし、今は治っている。他の部位も動くようだ。体から流れ出した血液も戻ってきている。

もう死の危機からは脱したようだ。

体から力が抜け、ミズオは息を吐いた。

「勝った……のか……」

安堵と共に、ミズオは拳を握った。

いつまでも自分の血の池に横たわっているのも嫌なので、ミズオは起き上がり、そして扉の鍵を閉めていないことに気がついた。

牛男は扉を開ける知能はあったのだ、開けておけば侵入してくださいと言っているようなものだ。なんか増えてたし、もう一体やってきてもおかしくない。

「ていうかセーブルームなら敵の侵入はできないようにしてくれな

いかな……」

ぼやきつつ鍵をかけていく。3つくらいでいいか、とも思いつつ、怖いので8つ全てしっかりとかけた。

そして振り返る。

視線の先には、牛男が取り落とした斧があった。引っ張り込んできたのだ。

両刃の、柄が1.5メートル以上あるような大きな武器だ。

刃に挟まれた柄の先端はとがっており、これで突かれたらとても痛いだろう。

(これはいいな……)

手に持ってみると、意外と重くない。もちろん筋力強化のおかげだが、十分武器として活用できそうだった。

「まあ、今は置いておこう」

手を離すとゴトリと重厚な音を立てながら、斧は壁へと倒れかかった。

初の戦利品である。置いておこうといいつつも、ニヤニヤしながら何秒か眺め、満足したミズオはもう一つの今回の戦いで手に入れたもの——スキルを見るために視界の隅にあるウィンドウを見た。情報端末の出す画面は右上のバツ印に触れることで消せるが、それをしなくても勝手に消えるものと、放っておいたら視界の隅で小さくなるものに分かれる。

今回の戦いで出た画面群は大半が後者のようだった。

そのうちのひとつを見て呻く。

（カウンターアタックねえ……）

『「カウンターアタック」…攻撃の回避後1秒間に繰り出した攻撃へ補正がかかり、50口径拳銃から発射されたマグナム弾並みの硬度と速さの攻撃となる。攻撃を繰り出すために使用した部位に相応の反動あり』

ハンドキャノンと呼ばれることすらある、50口径の拳銃並みの攻撃が出せるようになってしまった。

反動が半端ではないのだが、もともと反動が半端ではない電磁張り手と組み合わせたらどうなるのだろう。腕が千切れそうだ。

「なんか、もっと通常攻撃に使えそうな奴が欲しいなあ。牽制として使えるような」

とりあえず、カウンターアタックはいらないので消去した。しかしカウンターアタックの条件を満たしたことは無駄ではなかった。

『初めてスキルNo.38を獲得したため、スキル獲得ボーナスを得ました。「動体視力強化」が起きました』

スキルを得るだけで自身にとってプラスになるといううれしい誤算である。今回の強化は確実に戦いを有利にするし、もしかしたら最初に条件を得たスキルの条件を満たすことができるかもしれない。

（これなら、斧を振り回すスキルが出て、それが筋肉系だったら…

…どうなるんだろうな…!）

ワクワクしてくる。今すぐにも試したかったが、斧を見て現在の状況を思い出した。

セーブルームの床は血まみれである。足を滑らせてしまいそうだ。

それにポイントを使って何かをした方がいいかもしれない。時間は有限だ。この小屋も後十数時間で無敵時間が切れる。

（拠点が安全なうちに、周囲の探索をすべきだろうか）

手にはまっている情報端末には、大陸の白地図があつて、ミズオの居る地点が点滅している。小さくセーブルームと書かれており、さっき一步だけ出た場所の色がついていた。行った場所の情報が自動で書き込まれるという地図なのだ。

大陸がどれくらい大きいか分からないが、地図で悩むことはなさそうだ。この便利すぎる地図なら迷子にはなるまい。

ミズオは悩んだ結果、斧の扱いにある程度慣れてから、外に繰り出すことにした。

「なんかスキル得るかもしれないしね」

ミズオは呟き、斧を振りかぶる。この小屋の天井が高くて良かった。

「つつせい！」

全力で振り下ろすと重たい斧はすっぽ抜け、壁に激突して落ちた。振ると予想以上に重い。牛男たちがあんなに筋肉モリモリになる理由が分かった。

「まあこういうこともあるよな」

うんうんとミズオは頷く。全てが上手くいくはずもない。しかしどうやら、すぐ外へ繰り出すという訳にはいかなそうだった。

第三話 反動がやばい（後書き）

苦情3. 反動がありえないくらい厳しいんですけど……

A. 無反動で強力な攻撃ができると思っていたあなたの頭が心配です。

情報端末の内容（読まなくても問題なし）（前書き）

読まなくても問題ありません。

しかし読んだ方がいて、話と矛盾を発見してしまったら修正し忘れないので教えてほしいです。

情報端末の内容（読まなくても問題なし）

プレイヤー…奥住瑞夫（21）

1回目00…00…00／合計00…00…00

ステージ1…森林地帯からの脱出

－スキル 「0／2」

＋装備スキル

－ポイント

－スキル強化

- ・ポイントを4pを消費してスキルを強化できます。
- ・強化済みのスキルをさらに強化するには前回強化に消費した分の2倍のポイントが必要になります。
- ・上限はありませんが、リセットが起こった場合、獲得したスキルは強化していないものとなります。

－スキルスロット増加

- ・ポイントを10ポイント消費してスキルスロットを増加できます。

・上限はありませんが、リセットが起こった場合はセーブした時のスキルスロット数に戻ります。

－情報の取得

－スキル獲得条件に関する情報……3p

- ・スキル獲得条件を取得できます。
- ・この情報は情報端末には記憶されません。
- ・獲得条件を取得できるスキルは、現在のプレイヤーが獲得できるものからランダムで選ばれます。

- ・スキルの名称は取得できません。

- ―魔王軍兵士などの情報……3 p

- ・戦闘したことのある魔王軍兵士などの情報を取得できます。

- ―地理情報……3 p

- ・白地図は最初から用意してあります。

- ・触れた部分を中心として、半径10キロメートルの範囲の詳細情報を取得できます。

- ―社会情勢……3 p

- ・キーワードに関する情報を取得できます。

- ―その他の情報……5 p

- ・その他の情報と認められる情報を取得できます。

- ・一部取得できない情報もあります。

―支援物資の取得

- ・ポイントを消費し、物質を取得できます。

- ・この項目はセーブルームでのみ選択可能です。

―食糧

- ・一日分の食糧（ランダム）と水……1 p

- ・一食分の定食（ランダム）……1 p

- ・内服薬と認められるもの……3 p

- ・究極の一品（ランダム）……10 p

- ・至高のメニュー（ランダム）……30 p

―消耗品

- ・水溶性ティッシュ五箱……1 p

- ・その他消耗品と認められるもの……3 p

―インテリア

- ・ここで選択した項目による変更は、リセットが起こっても引き継がれます。また各セーブルームに反映されます。

- ―調度品……3 p

- ・生活に使う身の回りの物を取得できます。

・品質のグレードはランダムで決定されます。

―家具……10 p

・家具に分類される物を取得できます。

・品質のグレードはランダムで決定されます。

―内装……15 p

・建物内部の設備や装飾に分類される物を取得できます。

・電気やガスなどは自動で供給されます。

・品質のグレードはランダムで決定されます。

―武装

―兵士セット……2 p

・剣や弓などの武器と、盾や兜などの防具からそれぞれ一つずつランダムで選ばれたものを取得できます。

・品質のグレードは低級です。

―超科学武装……50 p

・地球における21世紀の科学レベルを超越する機構を備えた武装をランダムで取得できます。

―概念武装……100 p

・何らかの概念が込められた強力な武装をランダムで取得できます。

―その他

―修理

・代謝の活発化による治療……1 p

・生体部位破損・欠損の修復・復元……2 p

・体調不良の快癒……1 p

・その他の修理・整備……2 p

―鑑定……2 p

・情報端末と接触している物質の鑑定が可能です。

―清掃

・セーブルーム及びインテリアの清掃・整備……2 p

・その他のモノの清掃・洗浄……1 p

―情報の閲覧

＋スキルの履歴

―ポイントで取得した情報

―魔王軍兵士などの情報

＋一般兵

＋上級兵

＋特級兵

＋魔人衆

＋五將軍

＋四天王

＋三神將

＋双極帝

＋大魔王

―地理情報

・なし

―社会情勢

・なし

―その他

・なし

―ヘルプ

―ゲームの目的

・このゲームは大魔王を倒すことを目的としています。大魔王のいる場所は不明ですが西の方にいると推察されています。

―ルール

・このゲームでの死亡は、擬似的なものです。
・このゲームにおいてプレイヤーは死ぬたびにセーブルームへ

と精神を逆行します（以後、この現象をリセットと定義します）。

・リセット時に消費するポイントは5 pです。5 pが払えない場合はリセットが起らずゲームオーバーとなり、プレイヤーの人格は消滅します（この状態が、一般的な死亡と言えます）。

一クリア特典

大魔王を撃破した場合に得られる特典です。

- ・元の生活場所・時間へ送還……0 p
- ・この世界での記憶を消去……10 p消費
- ・元の生活場所へスキルの持ち帰り……1つにつき100 p消費（獲得したことのあるスキルのみ）
- ・死者の蘇生（プレイヤーが会ったことがある存在のみ）……1000 p消費

一スキルについて

一スキルの獲得

・一定の条件を満たすことにより、プレイヤーは超常的な技術、能力を得ることができます。

・一度獲得したことのあるスキルは、「スキルの履歴」の項目でどのような条件か確認することが可能です。

一スキルの装備

・獲得したスキルは自動で装備されます。スキルの装備はスキルスロットの数だけ行えます。

・スキルスロットが一杯の場合、新たなスキルを装備するかどうか、どのスキルを装備から外すか選択できます。

・一度外したスキルはリセットするまで装備することができません。

一スキルスロット

- ・初期状態では二つのスキルスロットがあります。
- ・ポイントを10ポイント消費してスキルスロットを増加で

きます。

・ 上限はありませんが、リセットが起こった場合はセーブした時のスキルスロット数に戻ります。

－ポイントについて

－ポイントの獲得

・ 以下の時、ポイントを獲得できます。

－ 24時間経過ごとに1p

・ リセットが起こった場合、カウントはセーブした時の状態からまた始まります。

－ ステージをクリアする。

・ このゲームにはステージごとに達成率が設定されており、クリアすると達成率に応じてボーナスポイントを獲得できます。

・ クリア自体のポインは10pです。

－ 魔王軍の兵士などを倒す。

－ 殺害・封印・重度の障害を負わせる、などの行為によって以下の対象を再起不可能な状態にした時、対象の階級に応じたポイントを得られます。

・ 一般兵……4p

・ 上級兵……7p

・ 特級兵……11p

・ 魔人衆……16p

・ 五將軍……32p

・ 四天王……49p

・ 三神将……67p

・ 双極帝……86p

・ 大魔王……100p

－ その他

－ セーブルームについて

- ・ゲームの拠点となる建物のことです。
- ・各ステージごとに一つ用意しており、初めて寝台に触れた時にセーブが起きます。

- ・セーブが起けると、そのステージより前のセーブルームは破棄されます。

- ・セーブもしくはリセットされてから72時間は「不壊」の概念が発動しているため、内部や外部から破壊することはできません。

一 情報端末について

- ・初期に左手首に埋め込まれている珠のことです。
- ・プレイヤーの指紋もしくは音声を確認して起動します。

- ・「起動」「情報を出せ」などの言葉に反応してウィンドウを展開しますが、邪魔だと思われる場合はキーワードを設定すると良いでしょう。

- ・操作、設定変更等はウィンドウに指先で触れるか、音声で指示することで行えます。

- ・指で操作する時は、実行したい項目に二度触ってください。
- ・破壊や取り外しはできません。

- ・左腕が切断されるなど体の中枢との連絡が取れなくなった場合は、右腕など、目に見える範囲に新たな端末が出現します。

- ・リセットが起きた場合にも、情報は引き継がれます。

一 プレイヤーについて

- ・お答えいただいたアンケートにてゲームをプレイしてみた
いと答えられた方の中から抽選でプレイヤーを決定いたしました。

情報端末の内容（読まなくても問題なし）（後書き）

11／10 ちよつと修正

第四話 外は危険がいっぱい

斧にも色々あるが、これは間違いなく戦斧だ、とミズオは思った。長くまっすぐな柄の先に、広く板のような鉄の刃が二枚、両側についている。

刃は緩やかに湾曲し、当たった一点に力が集中しやすくなっており、突いても傷が与えられるように二つの刃にはさまれた柄頭は尖っているのだ。

そして何よりその重さ。恐らく20kgはある重量で、人間など頭から両断できるはずだ。

重心が考えられているようで、振る速度に力を込めやすかった。

【スキルNO. 382の獲得条件『重量武器を使い100回の素振りを行う』を満たしました】

「よし」

ミズオは荒い息を吐きながら目の前に展開された画面を見た。薄青のウィンドウの上を、文字がサラサラと流れてきて、文となった。

【新たにスキルを獲得しました。獲得条件が登録されます】

【スキル「ラストインパクト」を獲得しました。初獲得ボーナスとして筋力が上がります】

「お、おお……!？」

ラストインパクトとか言う格好いいスキル名に驚く暇もない。膨らんでいた筋肉が今度は逆に収縮していった。しかし筋肉の量は減っていない。確実に体重は増えている。筋肉の密度が増加したのだ。

「これやばいだろ…」

言葉とは裏腹に、溢れるパワーを感じて頬はほころんでいる。恐ろしい力。重かった斧が片手で振り回せそうだ。しかも膨れ上がった筋肉がないため動きが阻害されず動きやすい。

それにラストインパクト。斧を振って獲得したのだから斧を使うスキルのはずだ。

「電磁張り手は反動やばいし、こっちのスキルに……いや腹筋の方が要らないか？」

腹を守れるのはいい。しかし、攻撃手段が増える方がいいのではないだろうか。

「もし……もしだ。腹筋スキルをポイント消費して強化した場合、全身強化スキルになったとしたら？」

その時はとても嬉しい。いざという時にサツと固められるのはさっきの戦闘で体験済みだ。全身を固くできるのは、任意のタイミングで解除できるアストロンとも言えるべき状態になる。

スキルの強化は4ポイントである。現在総ポイントは13p。やってみるのも良いだろう。

「や、やってみようか……。身を守るのは大事だし……。なにより強

化するって言うのも一度やっておきたいしな」

今持っているスキルであれば、断然強化するのは腹筋スキルの方だ。電磁張り手を強化なんてしてみろ、反動が強くなって使うたびに腕がロケットパンチのように千切れて飛んでいくに違いない。

新しいスキルを装備するかどうかは、保留できる。とりあえずラストインパクトは置いておいて、「鋼鉄の腹筋」を強化してみることにした。

『強化しますか？ Yes／No』

「します。Yesです」

『……ホントに強化しても良いのですか？ Yes／No』

「お、おい、脅すなよ！ なんだこのセリフ！」

叫びつつ、ミズオはYesを選択する。メッセージウインドウはしつこく確認してきた。

『これが最後の確認です。後悔しませんね？ Yes／No』

「何だコレ……やっぱやめるか？ い、いや！ こうと決めたら意志を貫く、それが俺だー！ YES！」

『「鋼鉄の腹筋」を強化します』

————ギュギュギュギュ————

脳裏から飛行機が錐揉み回転飛行するような音が聞こえ、気がつけばスキルの強化は終わっていた。

『スキル強化シーケンスが終了しました』

『スキル「鋼鉄の腹筋」は「腹筋ミサイル」へと変化しました』

「み、ミサイル!？」

ミサイルである。

『「腹筋ミサイル」…腹筋の数だけ腹部から対戦車ロケット弾並みの威力、射程のミサイルを放てる。ミサイルの数に応じて腹部の硬さが変化し、全て発射すると内臓が内圧によって腹膜を突き破り、こぼれ出す。2時間で一つ補充される』

「凄いけども! 凄いけどもね!？ 全弾発射したら死ぬのと一緒にじゃない!？」

『スキル初獲得により、獲得情報の登録が行われるとともに、獲得ボーナスとしてアイテム「腹出しの鎧」を取得しました』

空中からぱいと投げ出されるように、金属でできた物が降ってくる。慌てて受け止めると本当に鎧だった。とても軽い素材でできているが、強度はかなりある。ミズオの全力でも曲がらない。

兜やすね当て、靴や籠手も付いている全身鎧一式で、見事に鎧の腹筋の部分に穴が開いていた。

ここから腹筋を打ち出せと。

「うん、まあ鎧を手に入れたということだ」

いそいそと着込んでみる。すね当てなど留め金がどこにあるか不明でかなり時間がかかったが、とりあえず全て着ることができた。

「わー、何も着てないみたいだ！ 羽のように軽い！」

筋力アップの恩恵か片手で逆立ちして腕立てとかも余裕でできる。

「よし、じゃあ張り手はバイバイして、ラストインパクトをSet！」

ガシーン！と脳内でスロットにスキルが嵌る。さっそく使ってみた。

「うむむ……ラストインパクトオ！」

ラストインパクトは武器を振る時に腕に力を込めるスキルのようだ。この腕への力の込め方が、とても繊細と言うかなんとかスキルがないととてもできないような、微妙な力の込め方であった。

しかし威力がやばかった。

振り下ろした斧は白く発光し、切りこむと豆腐に振り下ろしたかのように抵抗なく滑り込んだ。

寝台に向かって放ったラストインパクトは彼の筋力によって彼の唯一の寝どこをバラバラに粉碎し、スキルの効果で欠片を燃え上がらせた。

高熱を武器へ付与するスキルだ。ラストインパクトは言い過ぎだが、かなり効果が高い。

使用後は斧が柄まで熱くなっている。刃を持てば指が焼けるだろう。しかし籠手をはめているので全然熱くない。キタでコレ！

「いやもう、これは勝ったね！ 腕も疲れないし！ なんでも来い

！
ヒヤッハー！」

ミズオはテンションの高いまま、扉の鍵を開け、外に飛び出す。
そして頭に振り下ろされた斧で、地面へと這いつくばることになった。



ガツンときた。

正直兜が無ければ、真っ赤な花が咲いていたに違いない。兜が丈夫で良かった。

しかもこんな強力な攻撃を食らったというのに、今は視界が揺れていない。首の筋力が衝撃を吸収し、脳の揺れを防いだのだ。

「っていうかお前また居んのかよお！　オラあああああああああ
あ！」

地面に這いつくばったままでも、重い斧を振り回すだけの筋力はずでに備わっている。

土を跳ね上げながらラストインパクトを発動させつつ、斧を水平に振り切ると、何かを両断する手ごたえ。

「ブモオオオオオ！」

斧の反動を使って無理やり跳ね起きると、右足を切り飛ばされた牛が痛みに悶えていた。断面は熱で燃やされ血は流れていないようだが、機動力を奪ったも同然だ。当然次の攻撃も避けられまい。

「貰った！」

右側に振り切っていた斧に左手を添え、バッティングをするように斧を振る。もちろんラストインパクト付きで。

シュオン、と抵抗なく牛男が上下に分かれて、クルクルと回転し、地面へ落ちる。やがて血肉がぼんやりと消え失せていき、斧だけが残った。

【一般兵』■■■■兵』を倒しました。4pのポイントを得ました】

「いや楽勝過ぎるだろ……」

油断して先手を取られたのに、無傷で勝利してしまった。まあ兜に傷はついただろうが、それだけだ。

喜びつつも少し釈然としない気持ちを感じる。こんな簡単に強くなれるって言うのはどうもウソ臭い。

——
バチン！

「ぬがつ！
い、いてえええええええ！」

「罨とか……お前、それは反則だろ……ラストインパクトで溶けるかな……」

恐ろしい威力の何かは、ミズオの体を吹き飛ばす。ミズオの足がトラバサミから千切れるように外れ、血が散った。鎧の靴は底が千切れてしまった。

「つつ、何が……ってまたトラバサミ!? ここにもかよ!」

咄嗟についた右肘がトラバサミに啜えこまれていた。鎧を突き破って肉まで挟まれている。本当に痛い。しかし痛がつている場合ではないのだ。ミズオを吹き飛ばした何かが、また来るかもしれない。あった。

焦って辺りを見渡した時、それを見つけたのは偶然、いや奇跡だった。

巨大な矢がミズオに向けて飛んできていたのだ。

地面にも落ちているそれが、ミズオを吹き飛ばしたのだろう。スキル獲得ボーナスで動体視力が上がっているためか、反応することはできた。

ミズオは間一髪頭を傾げてそれを避ける。ミズオの兜はフルフェイスではないのだ。避けなければ、眼球に突き刺さって死んでいた。

頭の横に突き立った矢は、バリスタで撃ち放ったかのような太い物である。地面へと深く突き刺さったのにミズオの頭の動きを制限するほど長かった。

「あ、あぶねえ……っでもう一本!？」

もう一本どころではなかった。続けざまに二本目三本目が飛んでくる。速度が速く、見えはするが反応が間に合わない。なにより不自由な体勢で避けるのは無理がある。

———ゴォン! 鎧の胸の上で矢尻が跳ね、回転しながら後ろに飛んでいく。もう一本、顔の向かった来た物を左手でそらすことに成功した。

「す、好き勝手やってくれるぜ……! 俺に遠距離攻撃が無いと思

うなよ！」

ついに使うことになったか…、とどこか哀愁を感じながら腹に力を込める。腹筋の一つがはめ込んであったかのようにシュ、と突きだし、震え出した。

—————シュゴゴゴゴゴ……ドシュ！

そして発射される腹筋のブロック。その尻から恐ろしい勢いで煙を噴き出しながら、まっすぐに矢が飛んできた方へと飛んで——
——撃ち落とされた。

（おいおい！　どんな精度だよ！本気で自重しろよ！）

視界が爆発の粉塵で何も見えなくなる。というか近いところで撃ち落とされていたらアウトだった。爆発で撒き散らされた破片が地面を抉っている。腹筋の破片がなぜか金属片なのはとりあえず置いておこう。

戦々恐々とするミズオの兜に、煙を割いて飛来した矢が直撃する。ゴォン、と視界が揺れ、首に痛みを覚える。筋力が上がって無ければ確実に首が折れているところだ。

（だがチャンス！　目を狙ってこなかったということは敵も見えていないということだ！　しかもすぐに撃って来たということは場所を動いていない！　ぬうううううん！）

—————ドシュドシュドシュドシュドシュ！

一気に五発、腹筋を飛ばす。これで残り二発分しかないが、出し

惜しみはなしだ。死んだら元も子も無い。

腹筋をと名した後も立て続けに三発ほど矢が飛んできた後、煙の向こうで爆発音が聞こえる。ビリビリと大気が震え、土煙が吹き飛ばされた。

しばらく耳をすませる。もしかしたらどこかに場所を移していたかもしれない。どこから矢が飛んできても良いように目を見開く。

そのミズオの前に画面が展開された。

【一般兵「■■■■兵」を三体撃破しました。12pのポイントを取得しました】

「よ、ようし……てか三匹も居たのかよお……痛ッ！」

脱力と共に寝転がろうとして、右肘が完全にホールドされていることを思い出した。

「斧……あった。よし、ジュツと行くか。ていうかこのスキル無かったらどうすればいいんだよコレ。切り落とすとか？」

白熱させた斧を当てるとトラバサミが柔らかくなり、簡単に外れた。右肘には火傷を負うことになったが、小さいものだ。これくらいなら問題ない。

「はぁ……」

セーブルームに戻り、床に寝転がる。寝台は自分でぶっ壊してしまったので雑魚寝だ。鎧を着ていると寝にくかったのですべて外して転がしている。

腹が減ったので一ポイント支払って『一日分の食料と水』を手に入れてモソモソ食べていた。

「あーホント引き籠りてえ……。でも明日には拠点が無くなっちゃうかもしれないしなあ……。そうだ！　良い飯食おう。こんなカロリーメイトみたいなじゃなくて！　ポイント入ったし、この一ポイントで一食分の奴を食う！　やっぱり素晴らしいパフォーマンスは素晴らしい食事から生まれるんだよ！」

ミズオはそのそ立ち上がり、情報端末に触れ、操作する。

『ポイントを1p支払い、「一食分の定食」^{ランダム}を取得しますか？』
「お願いします！」

カチャン、と地面の上にトレイが出現した。ホカホカと湯気を立てるお味噌汁。つやつやの白米が大盛にされた茶碗。皮がパリパリとした鮭の切り身。インゲンの胡麻和え。お新香。漆塗りの箸。

「こ、神々しい……！」

普通の日本食がこれほどまでに旨そうに見えるとは想像すらなかった。誰か職人が作ったという訳でもないのだろうが、久しぶりに目にした気がする日本食はミズオの目にまぶしく映った。

しかし腹が鳴った。体は正直だ。旨そうな飯を早く食べたいと騒いでいる。ミズオは恐る恐る白米を口に運んだ。

「いただきます……う、ウメエ……。旨すぎだろコレ……。あ、ち

よつと涙出そう……」

殺伐としたこの訳のわからない場所で、感じる白米はいつも食べていたコシヒカリ。それが堪らなく嬉しい。ご飯には人を癒す力があると強く感じた。

「よっし、充電完了だ。行くか」

食事を堪能したミズオは頬を叩いて立ちあがる。
両手に斧を持ち、鎧を着込むと準備は終わった。

「第一ステージとやらの目的は森林からの脱出だろ。まっすぐ行けばいいさ」

奇襲に気を付けつつドアを開け、また罠と狙撃に気を付けつつミズオは歩き始めるのだった。

第四話 外は危険がいっぱい（後書き）

苦情 4・ 罨とかマジキチ。

A. 即死罨じゃないところに優しさを感じてほしいです。

第五話 森の中も大変だった

現在の時刻は14時42分。

情報端末によるとこの回の始まり、つまり2回目のリセットから28時間42分が経過しているらしい。セーブルームが無敵の要塞じゃなくなるまであと43時間ほど。

その刻限を待たず、ミズオはセーブルームを離れることにした。

一步外に出ると迫力のある密林にぐると囲まれており、小屋の周りの僅かな土肌の露出を除いて緑しか見えない。

円筒形にくりぬかれた青い空には、一つだけ山が見えた。見上げる角度的に、相当な高さだ。

（とりあえずあの山を目指そうか）

それはちょうど矢が飛んできた方角でもある。途中で弓を拾えたら儲け物だとミズオは思った。

この世界では、死体は勝手に消え失せるが武器は残る。ミズオが倒した牛男たちの斧、計三本は一本持つて残りはセーブルームの中に放り込んでおいた。

弓と矢を手に入れられれば、新たなスキルも手に入るだろう。

「つと、ここにもトラバサミがあるのかよ」

地面の突起を目ざとく見つけ、ガンと地面に斧を打ちつけると、衝撃でガチンガチン！と周囲の二つのトラバサミが作動する。よくよく眼を凝らせば露出した地面には凄い頻度で埋められていて、フラフラと歩きだしたら足が短くなること請け合いだった。

よくもまあ、転んだときに右腕だけで済んだものだ。

しかし、森の中にはなさそうだな。巧妙に隠されていたら分からないが、その時は向上している動体視力を頼りにしよう。

一応森の中に入る前に鎧の様子を確かめる。この鎧は勝手に再生する謎機能が付いていて、さっきトラバサミに食いちぎられた靴の底もいつの間にか直っていた。

（大丈夫そうだな）

ミズオは頷き、森の中へと歩を進めた。

現在のミズオのポイントは23p。元のポイント数に戻りそうなほど貯まっている。このポイントを使ってスキルを強化するとかスロットを増やすとか色々したほうが、森を脱出できる可能性は上がるだろう。

しかし、ミズオはこの世界のクソゲーっぷりからして、初見殺しを用意されていることを疑いはしなかった。つまり今回は様子見に徹するのだ。

（死ぬのはまあしょうがない。早くクリアするための回り道だ……怖いけど）

唇を噛んで覚悟を決める。

黙々と進んでいると、森の中には罠が無いようで結構良い速度で進む。筋力強化は持久力も向上させてくれているらしく、周囲を警戒しながらの進行でも、汗は流れるが息が切れない。

密林の中は極彩色の花や真つ黒の蛙や粘つく樹液や張り出した木の根っこや鬱陶しく飛び回る小バエやすえた様な妙に甘い香りや……色々と鬱陶しい物が盛り沢山だったが、体力があるためミズオの集中力は途切れそうもなかった。

これは案外楽に脱出できるかも、と考えていると、前方からガサガサと揺れる音がして、ミズオは立ち止まった。鎧が擦れてガシャ、と音がする。

そこから微動だにせず、ミズオは考える。前方からは相変わらず葉と何かがする音がする。近づいてきているような気がする。ギヤッギヤッギヤッ！と遠くで何かが鳴いている声が煩わしかった。

（何かが近づいてきている…？）

緊張し、自分の呼吸音が煩く感じる。息をひそめ、腰を落とし、そろそろと前方からは影になるように木の陰に隠れ、斧の刃をちょっと出して鏡のように何が来るかを窺った。

コロロ……

かすかに聞こえる音。何かが喉を鳴らしている。ネコ科の生物だとミズオは直観する。飼っていた猫の出していた音にそっくりなのだ。

刃に移る光景の中、大きな葉の陰に二つの光る瞳が映った。暗がりには潜むシルエットは馬ほどもあった。

（やっぱりネコみたいだ……でもでかい……）

その影がしなやかに動き始める。巨大な体を弓を引き絞るようにぐっと沈めた。

ミズオが目を凝らそうとした一瞬、ブウン、と目の前で小バエが飛びまわり、顔を振ってしまった。急いで目を戻すが、いない。揺れた葉っぱがあるだけだった。

（ど、どこだ！）

——ザッ！

「————ガウアッ！」

（上っ！？）

叫び声とともに隣の本が揺れる。上から何かが降ってくる気配がするが、反応が遅れた。何が降ってきているのか、兜が邪魔になっ
て見えない。

「ぐうっ！」

ミズオは押しつぶされ、地面へと叩きつけられた。
背中に乗る巨体が大岩のように重い。

即座に何かで頭を挟みこまれる。

顎だ。二本だけ長く伸びた牙が、ミズオの顔の前に差し込まれ、
兜の両側、耳の辺りからメキメキメキ、と言う恐ろしい音が聞こえ、
ものすごい圧迫感を感じる。どんな顎の力をしているのか、兜を噛

みつぶされそうだ。

いや、凄い力で引っ張り上げられている。まず首の骨が折れそうだ。兜ごと引っっこ抜かれるのが先だろうか。

（うぐぐぐぐッ！ こ、このやろッ！ 俺の首の筋力なめんなあああああああああ！）

地面へと腕を突き立て、首を無理やり前に倒した。首だけの一本背負いだ。首の前側からビチ、と嫌な音がする。筋繊維が何本か切れたに違いない。

背の乗っていた巨体が、鎧の兜を口に咥えたまま隣の木へと叩きつけられた。ワサツと木が揺れ、大きな葉が落ちてくる。

噛みつきが緩んだ瞬間に、ミズオは兜を置いて首を引っっこ抜く。ネコ科の巨体は身をひねって着地しようとしていた。慌ててその下から腕立て伏せの要領で跳び退く。

ズウン、と着陸したのは馬の背ほどの体高を持ち、全身を筋肉の鎧に覆われたサーベルタイガーだった。あの長い二本のアゴの牙、サーベルタイガーに間違いないはずだ。

（っていうかでかすぎだろが……！）

サーベルタイガーは口の中に残っていた兜を噛みつぶしてから吐き捨て、牙をむき出しにして唸り声を上げる。ビリビリと大気が痺れるような威圧感があった。

目の高さは同じくらいだが、はるかに見下ろされている。

「は、半端ねえな……！」

根源的な脅威を感じ、ミズオの声は自然と震えた。

脈絡もなく、叫びもせず、サーベルタイガーは前足をふるってき
た。丸太が横なぎに迫ってくるようだ。ミズオは避けるという思考
すらできず、腰を落として腕を受けた。

ズン、と鎧を通して右肩に鈍い痛みが走り、ミズオの左足が脛ま
で土に埋まった。

そしてサーベルタイガーの攻撃は止まらない。

巨体が伸びあがり、上から被さるように噛みついてこようとして
いるのが見える。まるで壁が倒れてきているような圧迫感だ。

（しかしだ。落ち着いてみると、牛男とどっこいどっこの強さな
んじゃないか？）

何度も死にかけ、実際殺されたためか、一歩間違えば死ぬという
場面でも割と冷静な思考が、「これならいける」という結論を出し
た。

よってミズオは全力で迎え撃った。

ミズオの学生時代、ボクシング部で後輩にくらわしてその場でゲ
ロを吐かせた一番の得意パンチ。

———左ボディアッパーブロー。

ミズオは土に埋まった左足に向かって左腕を引きながら体を倒し、
右肘を引いて体幹を回転させながら即座に起こす。反動の付いた左

拳が強化された筋力によってかつてないほどの勢いを持った。

「—————おらぁッッ！」

反動でミズオの左足が、より深く土へと潜り込む。

噛みついてこようとする顎はミズオの上半身を飲み込むほど大きく開かれていた。その下顎に、ミズオの左がめり込んだ。

サーベルタイガーの牙が砕け、斜め下からの攻撃で顎が跳ね上げられた。喉が見える。

手は届かないが、遠くを攻撃する武器ならある。

ミズオは口をニヤリと歪めた。

「ちょうど一発残ってたぜ」

ミズオの腹からミサイルが飛び出し、巨体の喉の中なかへと突き刺さる。

ミズオは瞬時に体を丸めて、頭を抱え、無防備な頭と腹を守った。

—————轟音。

ミズオは爆風に押し飛ばされ、地面をゴロゴロと転がった。火薬のにおいと泥の匂いが混じって、おまけに視界もシェイクされているので吐きそうだ。

体は鎧のおかげで大事ないが、無防備な腹に何かが当たって結構痛い。起き上がるとミズオが持っていた斧の柄が圧迫しているだけだった。

七発ミサイルを撃ちだした腹筋はつるりとしており、触ると脂肪でできているようにフワフワだった。随分と柔らかくなったものである。これは腹に一撃食らうと致命傷になりそうだ。

（そうだ、トラは!？）

顔を上げると、今まさにサーベルタイガーが倒れるところだった。失った頭をまるで地面に突っ込んでいるような格好で、巨体が崩れ落ちる。

火薬のにおいと泥の匂いに、血の匂いが加わってさらに不快指数が上がった。

ミズオは落ちていた再生中の兜を拾って被りながら、サーベルタイガー（巨）の死体を眺める。

「これでさらに4ポイントか。苦勞したかいがあるな」

ミズオは画面が展開されるのを待った。

しかし、一向に画面が展開されない。おまけにサーベルタイガーの死体も消えない。ミズオは顔色が悪くなっているのを自覚しつつ、この状況を説明することのできる推論を思いついたので口に出してみる。

「もしかして、仮に、仮にだぜ？ 魔王軍の兵士とやらじゃなくて、ただの動物だからポイント入りません、とか？」

仮定の話だったのだが、呟いてみればそれしかなさそうな気がする。

『その通りです』

その通りらしい。情報端末のくせに意外とフレンドリーである。

「が、頑張り損かよ……」

その場にへたり込みそうになったが、茂みの中からミィミィと小さなトラが二匹寄ってきて死体に群がるのを見て、ミズオは立ち上がり、気まずい気持ちでその場を去ることにした。

（子持ちだったのかよ…!）

親を殺した自分がココにはいけない気がしたのだ。

（ちくしょう、この世界を作ったやつはとことん悪趣味だ…）

自分が悪いわけではない、正当防衛だと思いつつも、罪悪感は拭えそうになかった。



サーベルタイガーとの戦いから10分ほど進んだくらいで、ミズ

オの左前方から木の上をザザザと移動する何かに、ミズオは気づいた。

「今度は何だよ…猿か？」

兜の淵が邪魔だったが、なんとか見ることができた。かなりの速度で動いているそいつは人型で、結構な大きさだ。三メートル近いかもしれない。

まっすぐ近づいてきている。

「少しは休ませてくれよ……」

舌打ちし、腰を落として身構えるミズオに、木の上からそれは飛びかかって来た。湾曲した大ぶりのナイフを両手に持ち、それを頭上から振り下ろしてくる。

速い。

「ぬうん！」

迎え撃つミズオは斧を振り上げる。ラストインパクトを発動して赤熱する斧が、ナイフ二本と打ちあって、眩いまでの火花を散らした。

押し込まれそうになって、臂力を込めて押し返すと、その人型はくると軽やかに回転して地面に降り立った。

人型は牛の頭をしており、体が青黒い。今まで散々見てきた奴の色違いである。あいつらは赤かった。

（また牛かよ！ バリエーション豊富だな！）

胸中で毒づいている間に、牛男はミズオを越えるように跳躍する。慌てて振り返ると、すでに牛男は何かを足場にしたのか、ナイフを振りながら跳びついてくるところだった。

「ッッ！」

ギリリと歯を食いしばり、体を倒すように回転させ、真上から斧を振り落とす。ガアンと刃同士がぶつかり合い、着地した牛男はまた跳びあがる。ミズオが起き上がると、とん、とん、と体に見合わぬ軽い音で周囲の樹上を跳ねまわる。

（ジリ貧だ……いつかやられる…！）

相手は余裕がありそうだが、ミズオはいっぱいいっぱいだ。

とは言え打開策が見えない。

一瞬姿を追い切れなくなった瞬間に、また牛男がナイフを向けて襲ってくる。

受け止めたが互いかなり近い。牛男は間髪いれずもう片方のナイフを突き刺してくる。

顔を倒し、兜をこする刃を感じつつ前進する。足を踏んでやろうと思ったが、牛男がミドルキックを放とうとしているのを見て考えを変えた。

「ぬあああっ！」

斧に力を込め、押し飛ばす。体勢を崩された牛男は力に逆らわず後方に跳び、また樹上へと跳びあがる。

「くそ！」

牛男を睨みつつ歯を噛み、打開策を考える。

（腹ミサイルさえあればあんな奴一撃だつてのに…いま撃ったら腸が出ちまう。補充されるまで一時間くらいかかるし…）

二時間で一つ補充される腹ミサイルのことは、ひとまず忘れた方がいい。このまま、斧でなんとか殴り倒すというのはどうだろう。しかし、赤い牛男の時から思っていたが、こいつらは基本的に高い技量を持っている。圧倒的な力とか、不意を突くとかしなければ勝つのは難しい。

今だって、動体視力が強化されていなければ二秒で鱈切りである。

（死ぬのも癪だ。…いや、そうか、こいつも多分4ポイント、だつたらスキル強化に4ポイント使って生き残るのも、一緒じゃねえか）

跳びかかって来た牛男を何とか押し戻し、ミズオは叫んだ。

「スキル強化だ！ ラストインパクトを！ すぐに！」

『強化します。シークエンス開始…5…4…』

（マジか！ 早くッッ！）

「オオオオオオオッ！」

牛男が咆哮し、びくりと動きを止めてしまう。硬直したミズオに牛男はナイフを投げつけてきた。

(!?)

予想もしていない奇襲に思考が止まりかけ、ミズオは慌てて腹に向かつてきたナイフを弾き飛ばす。

顔を上げると、息もかかるような距離に牛男が居た。ナイフを両手で持ち、振り上げている。四メートルの高さから振り下ろされる肉厚のナイフ。

——ガァン！

頭に攻撃を食らってミズオの視界がぶれる。首が縮みそうだ。

揺れる視界の中、このまま何もしなければ死ぬだけだと、ミズオは我武者羅に斧を水平に振りはらった。

居ない、手ごたえがない。

揺れていた視界が元に戻ると、目の前に牛男の足が迫っていた。

牛男が跳びあがって蹴って来たのだ。

(くそがあ！)

額で受けるようにするのが精いっぱいだった。首が千切れるような衝撃と共に、蹴り飛ばされる。

宙で一回転し、地面を転がって、止まる。頭痛が酷い。

顔を上げると牛男が走り寄ってくるところだ。立ち上がるのが間に合わない、そんな時にメッセージが聞こえた。

『シークエンス終了。「ラストインパクト」は「ファイナルアタック」へと変化しました』

笑ってしまうほどナイスタイミングだ。

（ラストとかファイナルとか好きだな！）

ミズオの頭に使い方がすらすらと浮かぶ。威力を知って、ミズオは笑った。これで負けたらウンコ野郎だ。

スキル獲得ボーナスは、新しい武器・禍々しいオーラを放つ凶悪な斧。

寝転んだまま、空中から出現した斧を掴み、そのまま振り上げる。左腕にありったけの力を込め、振り下ろした。

斧が妖しく輝き、ファイナルインパクトが発動する。

眩い光が突き立てられた地面から溢れ出た。それは四方八方、地割れのように20メートルほどを一瞬で走り、あと三步のところまで迫っていた青牛男にも迫る。あわててとび上がった青牛男が真っ二つになった。

血を噴き出して左右に倒れる牛男を見つつ、ミズオはため息をつく。

「毎回ギリギリだな……とはいえ、」

腕を使って起き上がる。

「これで4ポイントゲットで使った分はチャラだな。ヤレヤレだ」
『一般兵』■■■■兵』を撃破しました。4ポイントを手に入れました』

ミズオは疲れたように頭を振り、新しく出てきた斧のことを詳しく調べ出した。

第五話 森の中も大変だった（後書き）

ワンパターン化している気がする！

次はちょっとひねりますので見捨てないでやってください！

第六話 初見殺しがきつかった（前書き）

前回とは雰囲気違います。

……良くも悪くも違います。

第六話 初見殺しがきつかった

スキル獲得ボーナスで得た斧は今までと形は一緒だというのに、発する雰囲気があるで違った。

ステータス画面によると、武器のランクが1らしい。今まで持っていたのはランク外の物だったらしいので、強力な武器なのだろう。

新しく得たスキル「ファイナルアタック」というスキルには、このランク1以上の重量武器が必要らしい。でなければ発動することに武器がぶっ壊れるとか。迷惑な話だ。

しかもこのスキル、電磁張り手並みに反動がキツイ。効果は高いが、使い勝手が悪い。トドメ専用になるだろう。

ついでに「ファイナルアタック」も試してみた。野菜王子が放つ技と一緒に名前だからと言って地球を挟むような威力は無いが、自分を中心とした前面を半円状に半径20メートル決り飛ばすくらいの威力はあった。

連発すればさぞ森が歩きやすいだろうが、腕が千切れそうなので止めておこう。両手で放つと割と反動を抑えることができることも分かった。

その後も青い牛男が散発的に襲いかかってくる。近づいてくるたびにファイナルアタックで森ごと破壊していると、合計三匹目を倒した時に新しいスキルを得た。

『スキルN.O. 571獲得条件、敵対的な生物に10回連続で勝利する、を満たしたのでスキルを獲得しました』

『スキル「折れぬ心身」を手に入れました。「スキル履歴」に獲得条件が保存されます』

『「折れぬ心身」…傷の治りが早くなる。敵を殺害せずに逃亡するとこのスキルは失われる』

（おお、これは使える…！ 早速弾の残っていない腹筋スキルと入れ替えよう）

スキルの内容が良かったので、獲得ボーナスにも少し期待する。画面が展開された。

『スキルN.O. 571初獲得ボーナスにより、テンションがアゲアゲになります』

「アゲアゲだぜえ——！ って、なるかつ！」

地面に斧を叩きつけるミズオの前に画面が展開される。

『冗談です』

「ちょ、おまえ！ ふざけんな！ 冗談は言う時考えろよ！」

『それより、ノリ突っ込みありがとうございます』

「お、おう…」

いきなりお札を言われて、ミズオも少し神妙になった。こいつも普段ギャグが滑って大変なのかもしれない、などと思う。

「いや、まあ：俺も結構寂しいしな……。ずっと一人だとテンションがおかしくなるって言うか……。分かるだろ？」

一拍置いて、画面が展開される。

『私はお友達がいっぱいいますので分かりません』

「イヤミか！ いちいちムカつく野郎だな！」

『ちなみに恋人もいます』

「うるせえよ！ どうせ俺は童貞だよ！ 二十歳超えたのに童貞ですよ！」

『嘆くことはありません。童貞の妄想力は時に武器となり身を守る盾となり…』

「もういいから黙っとけ！」

なんだか疲れてきたミズオは力なく言った。

「そんでボーナスは何？」

『現時点での傷が無くなります』

「……そうか」

トラバサミにはさまれた右腕の傷も、サーベルタイガー戦で痛めた首の筋も、蹴られてから鈍痛がしていた頭も、気づけば全て治っていた。

最初からこう言ってくればありがたみもあったのに、今残るのは無駄な疲労感だけである。

嘆息まじりにスキル変更を指示する。

「じゃあ腹筋スキル外して新しいの付けといて」

『本当に付け替えても良いですか？』

「いいって。不安にさせるなよ」

『後悔しても知りませんよ？』

「…なんか悪いことが起こるのか？」

情報端末はすぐに画面を展開させた。

『特に何も起こりませんか？』

「くそがあ！　ぶっこわしてええええええ！」

『それでは、付け替えます。そーれ！』

（そーれ、じゃねえよ……）

頭の中でガシーン！　と新たなスキルがはめ込まれる。フワフワ立った腹筋が筋力強化三段階を施されたもの相応のガチムチしたものに戻る。

ボコボコした腹を撫で、ミズオは息を吐いた。頭を振り、顔を上げる。

「行くか」

少し情報端末の返事を期待したが、応じる声も茶化す声も無く、ミズオは長く息を吐いた。

木々をかき分け歩いていると、遠くからバシャバシャという水音がしてきた。それを聞いた途端、ミズオは喉の渇きを覚える。

（ちょっと逸れるくらい構わないだろ）

進路の右手にあるようだったが、自分の位置が分かる地図のおかげで迷うことも無いはずだ。

掻き分け掻き分け進んでいくと、開けた泉があり、そこで一人の男が、体中をビショビショの格好で背を向けて座っていた。

この世界に来て初めてみる人間である。服がローブだったり、髪の毛が水色があった白髪だったりと色々不審なことはあるが、話しかけて見たくなった。

なにより、その男は泣いていた。

「うう……」

「おい、どうしたんだよ」

回り込んでみるとその男はたいそうな美男子で、伏せたまつ毛や、空色の瞳が白磁のような肌を彩っていた。

男はミズオを無視して泣き続ける。

「おいたわしや……ああ……魔王様……」

セリフもそうだが、男の様子に、ミズオは違和感を抱いた。なぜなら男の流す涙は明らかに量が多く、まるで蛇口を捻っているかのようだったからだ。この泉は元からあったものではなく、男が流した涙のせいかもしれない、ミズオは脳内で警告が鳴り響くのを感じ、跳びのこうとした。

だが、間に合わなかった。

「人間風情が、この聖域で何をしているのですか？」

男の体から膨大な量の水が湧きあがり、それが大蛇の尾のようになりミズオを地面へと叩きつける。直径5メートルはある水の尾を避けることはできなかった。

ミズオのうめき声すら水の中に閉じ込められる。

「ああ……このような虫けらどもにあの方はお心を割かれて、結果として死んでしまわれた……私がもっと力を持っていれば、かの玄武王を凌駕するほどの力さえあれば……」

男は泣き続けているようだった。男の声が水の尾に押しつぶされて水中にいるミズオにも不思議と聞こえる。

（くそう、何だこいつは！ それよりもまずい！ 息ができねえ！）

最初に驚いて、息を大量に吐き出してしまった。水の中だというのに、押しつぶされるような圧迫感はそのままで、起き上がる事ができない。全力で地面を押しているのに、ピクリとも動かないのだ。

（訳も分らず死んでたまるかッ！ ファイナルアタックだっ！）

右手に握っていた禍々しい斧と左手に持っていた牛男の斧に力を込める。両手で同時に発動するのはやったことないが、できるはずだ。

（おらあああああッ！）

ファイナルアタックは振り下ろした方が威力は高いが、振り下ろさなくても発動する。

ミズオの両側から発動されたスキルが、彼の周囲をほぼ360度20メートルにわたって蹂躪する。土がめくれ上がり、木々が細切れになった。

左手の斧が弾け飛ぶのと同時にミズオを閉じ込めていた水の牢も吹き飛んで、ミズオは跳ね起きた。

「はあッはあッ……は……」

そして顔を上げて、苦しかった息をするのも忘れる程、啞然とした。

「煩わしいゴミ虫め」

男は確実に蹂躪の領域内にいたというのに傷一つなかった。服は

切り裂かれていたが、その下の切断されたはずの肌は、まるで水のように透明になって、体を再構成しようとしていた。

「消えろ」

秀麗な顔は歪めても美しい。しかしそこから放たれる悪意と、なにより空中に展開されたプール一杯分はあるような水の塊が、ミズオを震えさせた。

す、と音も無く、男が動かした腕に従うように空中の水が落ちてくる。

「—————！」

ミズオは声にならない絶叫を上げ、渾身の力を込めて「ファイナルアタック」を放った。

だがそれらをすべて水が覆い尽くす。凝縮されて鋼鉄のような硬さとなった水のハンマーは、ミズオを容易く押しつぶし、周囲の地形を塗り替えた。



目が覚めた。

「―――!」

叫び、跳ね起きる。

ミズオはセーブルームにいた。寝転んでいるのは斧で壊したはずの寝台である。死んで、リセットされたらしい。ポイントは26pになっていた。

（戻ったのか……）

手を見ると、付いていた筋肉が削げ落ち、ダルダルのミズオに戻っていた。

「はぁ……」

リセットは精神のみの逆行だ。肉体の変化も手に入れていたスキルも失われている。

また取り直すの面倒だなあ、と唸るミズオの前で、情報端末から画面が展開された。

『「CG集」が更新されました。「一の将軍・水の精霊との邂逅」』

そういえば、この情報端末も引き継がれるのだった。

C G 集とやらにも突っ込みたかったが、ミズオはそれよりもあれが精霊で、将軍だということに驚いた。

「将軍…？ あれ将軍なのか…？」

将軍と言えば、魔王軍兵士の一覧にある五将軍、というのが当て嵌る。一人倒すだけで32ポイント手に入る大変お得な敵だが、逆に考えれば32ポイント払うくらいの気持ちで戦わないといけないのだ。戦ってみて、とりあえず底知れないと感じたので、納得である。

（あれが5人か…：まあ倒さなくても良いかもしれないし。考えるのはやめとこう。とりあえず今の目標は森を脱出することだ）

そのためには、まずスキルを得なければならぬ。ミズオは腹筋を始めた。

一回二回…：三十回。

『スキルを得ました。「鋼鉄の腹筋」です。装備されます』

ガシーン！ と嵌るスキル。しかし肝心の画面は展開されない。

「おい、ふざけてるのか？ ボーナスクれよ」

『ボーナスはありません。ボーナスは初めてそのスキルを獲得した時に得られるものです。このスキルは二回目です』

「いや、この回では一回目だろ」

【この回？ いえ、二回目です】

「……マジ……？」

ミズオは認めたくなかったが、淡々とした情報端末とのやり取りで、理解してしまった。

どうやら、一度でも取ったことのあるスキルではボーナスが得られない。

ということは、以前使った戦法をもう一度使うことはほとんど不可能である。

(おいおい、ふざけんなよ……!)

ミズオはイライラしてきた。

もう、この世界全体に対してイライラしてきた。
積み重なって来た理不尽に対する怒りが許容量を超えて噴き出した。

「ツツ！ やってられるか！」

寝台を蹴りつけるが、元に戻った筋力では足が痛いだけだ。それすらも腹立たしい。

なぜ俺がこんな茶番に付き合わなければいけないのか。ゲームみたいな世界で、やりたくもない殺し合いをして……。

サーベルタイガーの子が親の死骸に泣きつくシーンが、痛みのように心に疼く。こんな痛みも負う必要はなかったはずだ。

ああ、イライラする。

もう全部投げ出してやろうか。
死んでしまおうか。

このふざけた世界のおかげで、死に対する耐性はついている。ちよつとあの扉から頭を出せば、牛男が綺麗に切り落としてくれるだろう。苦しみ暇もない。

死ぬ前に旨い飯でも食っていくのはどうだろう。悪くない。ああ、悪くないな。

（ちくしょうッ…！）

しかし、ミズオはそうしなかった。

このふざけたゲームのクリア特典にある「死者の蘇生」…これが魅力的過ぎた。冗談だと無視してしまうのは、この世界で色々と冗談みたいなことを見てきたミズオには無理だ。

深く息を吸い、吐き出す。頭が痛かった。

ミズオが命を投げ出すのは良い。

しかしミズオが迷惑をかけ、過労で死んでしまったあの人を生き返らせてあげられるなら、その可能性があるなら…。

『好きなことをやりな』

あの人の声が思い出される。最後までミズオのことを心配してくれていた優しい声。あの人は俺を信じてくれたが、俺は何もできていない。大学を辞め、惰性で働き、抜け殻みたいに過ごしていただけだ。

ああ、俺は逃げ出すわけにはいかない。

押し付けられてきた俺のために人生を棒に振ったあの人に、もう一度人生をあげるんだ。

「おばさん……」

痛みがひどい。頭を押さえる。

思い出したくもない、泣き叫ぶだけの情けなさすぎる自分がそこにはいた。振り払うように頭を振り、閉じていた眼を開ける。

もうあの頃の俺じゃない。蹲っているだけの俺じゃないってことを証明してやる。

「やってやるよ……」

ミズオは歯を食いしばりながら、とりあえず思いつく筋トレを始めた。繰り返すことによって何らかのスキルを得られるだろう。

ミズオは息を荒くし、ひたすらに肉体をいじめていく。

いつしか頭痛は消えていた。

『スキルNO. 821「飛翔脚」を獲得しました』 『ボーナスで筋力強化が起きます』

『スキルNO. 842「旋風脚」を獲得しました』 『ボーナスで筋力強化が起きます』

『スキルNO. 15「ライダーキック…光になあれ」を取得しまし

た』『ボーナスで三半規管強化が起こります』

『スキルNo.1001「君と僕の友情神話…握手からの頭突き」を取得しました』『ボーナスでテンションがアゲアゲになります』

「おまえ……………お前、二度目だろうが…しつこいんだよ…」

『ノリ突っ込みはしていただけないので……………？』

「ふざけんな」

『私も一緒にアゲアゲー！と叫ぶつもりだったのですが』

「はぁ……………」

ミズオの口からため息が漏れる。なんだか、シリアスに筋トレしているのがばからしくなった。

腰を下ろすと、尻に冷たい感触があった。汗だ。疲れた体がいつの間にか汗に濡れそぼっていたのだ。

（熱くなりすぎだったか……………）

あの人のために頑張るのはいい。だが、根を詰め過ぎるのは良くない。そのことに気づかされたというのもある。

ボクシングの試合でも、必死になればなるほど相手の動きは目に入らず、監督の声も聞こえなくなった。拳が壊れるまで叩きつけてしまうこともあった。

熱くなっではいけない。

冷め過ぎていてもいけない。

ニュートラルな時が一番動くことができるのだ。

心を闘争心で燃えあがらせ、頭は冷静に、相手を観察するのだ。

そうすれば、体に染みついた技術が、闘争心が、戦いをうまく進めてくれる。

これはミズオの中のルール。

例えば自分が変わろうと、相手が人間じゃなかりと、それは変わらない。

（常に諦めないようにすればいい。そこで一分でも早く、クリアしてやる）

ミズオは一息つくと、汗の水たまりから腰を上げ、また筋トレを始める。

『ちなみに本当のボーナスは、骨格の強化です』

「お、おう」

ミズオは目の前に展開された画面に驚き、少しのけぞってしまった。

正直こいつの存在を忘れていた。

そういえば、このお調子者のおかげで自分の状態に気づけたのだ。名前くらい知っておいても良い。明らかに人格があるし。

「なあ、お前名前とないの？」

『ほほう。私に興味津々ですか？』

「やっぱいいわ」

ミズオは筋トレを再開した。彼の前にまた画面が展開される。

『まあまあ。仮の名として、情報端末のジョーとでも呼んでください』

い。本名は恋人以外には秘密です☆
『うぜえ……』

その後も筋トレしたり小腹がすいてご飯を食べたりしつつ、2時間ほど経っただろうか。

ようやく準備は整った。

残りポイント25p

装備スキル

「飛翔脚」…地面を離れるたびに5歩だけ空中を歩ける。

「ライダーキック」…光になあれ」…高速で相手にドロップキックを食らわせる。反動強。

強化部位

筋力++++

骨格+

三半規管+

装備武器・防具

なし

「行くか。今なら牛男も三匹はいないはずだしな」

筋肉系のスキルは他にも「旋風脚」「大岩投げ」「ミラクルサイドステップ」を獲得したが、筋力アップボーナスだけありがたかった。ただいておくことにした。

結果筋力強化が四段階行われ、リセット以前よりも筋力がやばい。体の大きさは変わらないが、体重が半端じゃなく重くなっているはずだ。200キロくらいあるかもしれない。

そして内包するパワーが、段違いだ。今ならハン〇ー×ハン〇ーの世界の住人と張り合える気がする。

ミズオは顔を叩いて気合いを入れ、扉の鍵を外し、押し開けた。

第六話 初見殺しがきつかった（後書き）

11／11修正

心理描写を増やしてみました。
良くなったかどうかは不明。

第七話 いっぱい来るんだ…

牛男は、一般兵という名前にも関わらず、熟練の武器さばきと、強靱な肉体を兼ね揃えた厄介な存在だ。

今回は、これらに加えて鋼のメンタルを備えているということが分かった。奇襲にも動じなかったからだ。

「おらあ！」

扉を吹き飛ばすほどの勢いで蹴り開けたというのに、牛男は少しも慌てない。両者の距離が近かったためか、構えていない斧は放り出し、「ワタクシ、こう来ることも予想しておりました」とばかりに即座に回し中段蹴りを放ってくる。

ボツと風を切る音。

だが、ミズオの筋力は四段階強化されていた。強化一回で筋力はほぼ倍になっているようなので、今の状態は実に16倍。三段階の強化でこの牛たちとほぼ同等かそれ以上の肉体になるようだから、現在の筋力は牛たちの約二倍だ。

つまり、蹴られたくらいでは揺るがない。

バチイ、と左腹を鞭のような一撃が襲う。格闘技も使えるようで、技術では完全に負けている。だが、痛みに耐えるのはボクシング時代から割と得意だ。なにしろ、彼の専門はインファイトだったから。

（ツてえだろうがあ！）

腰を落として攻撃を耐えた後、頭を低くするように牛男の懷に潜り込む。突進するような勢いだ。即座にアッパーが迎え撃ってくる。こちらの顔ほどもあるようなでかい拳が硬く握られており、風を切るような勢いを持った良いパンチだった。

正直、牛男の技術が高すぎる。大学で2年間くらいしか習っていないボクシング技術では殴り合いでも負けていた。

（避けれない——当たる！）

ミズオは被弾を覚悟し、齒を食いしばる。

ガツン！と顎を下から殴られる。視界が明滅するが——ほんの一瞬だ。牛男の筋力や技術が凄いいえ、両足が地面についていない状態で放った手打ちのパンチ。強靱な首の筋肉が全てを受け流していた。

ミズオの動きは止まらない。

ぐ、と牛男の内股に当たるほど、左足を踏み込んで。

（————おらあああああああッ！）

堅く堅く齒を食いしばり、右足で地面を蹴り飛ばし、体の勢いと筋力の加速を全てを右腕に伝えて、野球のオーバースローのように殴りつけた。

「ブモオオオオッ！」

ズボ、と右腕に未知の感触がした。手首まで、牛男の赤黒い胸筋

に突き刺さっていたのだ。

牛男は口の端から唾を飛ばしながら反撃をしてくる。右のフック。首がねじ切れるような衝撃が頬に加わる。すぐ横の小屋の壁に叩きつけられた。右腕がぬるりと引き抜かれ、牛男の左胸から血が吹き出る。

（どういことだ、効いてないのか！？）

「ゴホオツ、ア・アアアア……」

ちがう。牛男は血を吐き、痛みに苦しんでいる。しかし痛みを抑えつける程の闘争心とその瞳からは溢れていた。

「ルアアアアアゝ！」

壁に叩きつけられて跳ね返ったミズオに、噛みつきが飛んでくる。牛の前歯がミズオを噛み砕こうと開かれる。

（敵ながら呆れた精神力だ……！）

「ぬうん！」

ミズオは逃げず、顎に力を入れ、額で迎え撃つ。グサ、とミズオの額に食い込みつつ、牛男の前歯が折れ飛んだ。ミズオの頭蓋骨も、強化でしっかり硬くなっているのだ。

（~~~~ってええええええええ！）

しかし刺されば痛いのは痛いのだ。

絶対血が出たぞこれ！ と内心叫びつつ、ミズオはもう一度もう一度拳を握り、後退した牛男の腹に、下から叩きつけた。

ぶわ、と牛男の体が浮き上がり、胸の傷から盛大に血が飛び出した。

そしてバックステップしたミズオの前で、地面に倒れた。その死体が徐々に消えていく。

ミズオの勝ちだ。静かに、ミズオは息を吐いた。

（武器も攻撃スキルもないと、こんなにキツイなんてな……）

ミズオの息は荒い。拳で殴り殺した感触も慣れなかったし、なにより額からボタボタ流れる血が体力を奪っていくようだった。

目の前に半透明の青い画面が展開される。

『スキルNo. 39 「真剣白羽取り金的」の獲得条件を満たしまして、初獲得ボーナスで動体視力強化が起きました』

「おお、動体視力はいいな。……ていうかそれって最初の、二回も獲得条件が出た奴じゃねえか」

『へえ、ミズオさんって結構物覚えいいんですね』

「馬鹿にしてんのか？」

まあこのふざけた情報端末はどうでもいい。

No. 39は、確か素手で致死性の攻撃を受け止めるとか何とかというのが条件だった奴だ。多分蹴りを受けた時に踏みとどまったのが良かったんだろう。

絶対無理だと思ったが、筋力を強化すればよかったということか。そんなの初期に分かる訳ないけど。

『それより、気を抜くのはどうかと』

「抜いてねえよ」

言うや否や、ミズオは跳び退いた。着地点にトラバサミがないことは確認済みだ。

ミズオがいた空間を貫き、開かれた扉にカアンと跳ね返ってでかい矢が落ちる。前回散々甚振ってくれた矢だ。

どうせこの矢を売ってくる奴もいるのだろうと思っていた。

だが、敵は遠距離から攻撃してくる。セーブルームに入れば大丈夫だろうが、結局はジリ貧だ。

だとすれば、どうするか。

（そのためのスキルをしっかり残してるんだ！）

ミズオはスキルを発動する。空中に跳びあがり、そこに地面があるかのように思いこみ、走るように足を振り下ろす。

『一歩目です』

ガアン！ 足の裏に硬質な感触があり、ミズオは空を蹴って進む。スキル「飛翔脚」の効果だ。二歩目、三歩目と続けざまに蹴って行く。進む先は、矢を撃ってくる方角だった。

だが、五歩で届くほど近くにいるわけでもないし、空を走るミズオは良いのだ。実際に二本目の矢が飛んできた。体を振り、掠らせ

ながらも何とか避ける。

ミズオは四歩目で前掲していた体を起こす。

（行くぜ、ライダーキック！）

ミシミシと足の筋肉が悲鳴を上げる。五歩目を踏み込んだ。

「光になるぜえええええええええええッ！」

——このスキルは、五歩の助走の後発動するのだ。

ボッ！ と揃えたミズオの両足が空中で白い光に燃え上がる。五歩目の踏み込みで信じられないほど体が加速し、ミズオは視界がぶれるのを感じた。

ゴギギギギギイ！

一瞬が引き延ばされていく。

加速して目視できない速度で進むミズオの足が、燃え上がる白い炎によって進路上にある全てを粉碎し、破壊の道を作り上げる。

（つか、まじ痛ええええええええええっ！ 痛すぎる！）

その間中、ミズオの足には物凄い激痛が走っていた。滅茶苦茶痛い。もげそうだ。

ミズオは蹴り進む中、弓に矢を番えた灰色の牛男が巻き込まれるのをしっかりと確認した。

牛男も当たった瞬間バラバラになった。

（これ、絶対ライダーキックじゃねえだろ！）

子どもがひきつけを起こす威力である。朝には絶対放映できない。

気づけばミズオは違う場所にいた。木を、地面を、多くの物を粉碎し、破壊の道を作り上げたミズオは、地面へ突き刺さっていた。

「ううう……」

足が凄く痛くて動けない。四段階の筋力強化で軽減されると思いきやそう言うのは関係なく、もう芯から腐り落ちそうなほど痛かった。

だが、破壊力は一級品だった。ミズオが破壊してきた道は幅10メートルはあったし、今いる着地点など、クレーターとなって半径20メートルは吹っ飛んでいる。

振り返ると、ちょうどパラパラと破壊され巻きあがっていた物が落ちてくるところだった。その中には、大きな弓の残骸もある。

地面に倒れて痛みに耐えるミズオの前に画面が展開される。

『一般兵「■■■■兵」と一般兵「■■■■兵」を倒したので8ポイントを手に入れました』

痛みを我慢しつつ白地図を開けば、すでにこの前進んだ距離の三分の二は来ていたのだった。



殺した牛男は灰色の弓を持っていた奴しか確認できなかったが、もう一体倒していたらしい。

「……他の魔王軍兵士も巻き込んだのか？　ていうか痛え…涙出そう…」

『その通りです』

白地図を展開してみると、この前来たところの三分の二くらいはすでに来ていた。大陸レベルの白地図では一ミリも進んでいないが、確実に森の外へと近づいている。

ライダーキックの推進力が半端ではない。

（これって連発したらすぐに出れるんじゃないか？　いや無理か）

魅力的な考えだったが、痛さがやばいのですぐに却下した。もう一発使ったら痛みで発狂するかもしれない。

「なあジョー。金的スキルまだ消してないよな？」

『ふん、「ジョー」とは気安く呼ばれたものですね。ふん！』

「……………」

こいつ二回もふん、って言いやがった。なんて呼べばいいんだよ。

『黙らないでくださいよ……。嘘ですよ。嘘。気軽にジョーと呼んでください。しかし「さん」付けされると私は興奮する、という情報を伝えておきましょう。あ・え・て・伝えておきましょう』

「……………」

うぜえ……

『それで、獲得スキルの装備を問う画面は15分ほど残っていますので好きな時に付け替えてください』

「…じゃあ、ライダーキックの代わりにそれつけてくれ」

『本当にいいのですか？』

「なあ、それ毎回やるのか？」

いい加減面倒臭い。早くしろよ。足が痛くてイライラしてるんだよ。

『様式美なのですが…しょんぼり』

「おい」

『では気を取り直して……そーれ！』

ガシーン！ とスキルが嵌り、ライダーキックの使い方がよく分からなくなった。そして身に着く「真剣白羽取り金的」。要は武器を挟んで止めてキックする技だ。相手に金弾が無くても良いらしい。

スキルを変えたことで、嬉しい誤算もあった。

「ん？ おお……………」

足から痛みが急速に引いて行ったのだ。しばらく痛むことを覚悟していたのだが、もしかしたら冷却期間というか、連続で使わせないための措置だったのかもしれない。

痛すぎるのもう二度と使いたくないが。

『さて、私たちの仲も深まってまいりましたね。好感度に応じて発生するイベントでも消化しましょうか』

突然、ジョーが頭の悪そうなことを言いだした。正直仲良くなった気はしない。ジョーが馴れ馴れしいだけだ。

だが、イベントというのなら期待しよう。

「何だよ。良いことか？」

『もちろん。有益な情報をつい漏らしてしまうお茶目な私、というイベントです』

「言い方はともかく、期待してみよう」

『はい。まずは、一つ目です』

複数あるらしい。ミズオの目の前に画面が展開される。

『セーブルームが魔王軍に乗っ取られましたので、帰らない方がいいですよ』

「おい」

突っ込まずにはいられない。まだ出て数分しか経ってないはずだ。というかセーブルームなのだから魔王軍の入室規制をしろと言いたい。

『二つ目。この森、実は聖域なのですが、盛大に破壊されたので魔王軍の一般兵と上級兵が集団でここに向かっています』

「はぁ!?!」

『チーム編成は、前衛が3人ずつ、後衛が3人ずつ。奇襲専門の一般兵と速度特化型の上級兵が三人ずつ、合計18人ですね』

「おいおい……」

それは無理じゃないだろうか。これなら、ライダーキックを残しておけばよかった。一網打尽にしてすげえ気持ち良かっただろうに。

『あ、来ましたよ』

「もう!?!」

ダカタッ、ダカタッ、と馬の蹄の音がする。

はるか遠く、ミズオが破壊した幅広い道の向こうから、馬に乗った人型の――――いや違う。馬の下半身に人の上半身の生き物、ケンタウロスだ。

それが三匹、剣と盾を構えて向かってくるところだった。赤い肌の上半身をさらすケンタウロスの背に、赤い牛男が乗っている。

「おいおいおい、待てよ! 勝てるわけ……」

勝てるわけないだろ、と叫ぼうとして、はたと口をつぐむ。勝てるかどうかは、ミズオ次第なのだ。最初から飲まれている訳にはいかない。そして、死ぬのもごめんだ。

（考えるんだ。逃げるのはダメだ。馬の足から逃げれるとは思えな

い。森の中に逃げてもあの青いのが来たらどうしようも無い…)

素早く確認すると、今あるポイントは37pだ。今あるスキルの強化に賭けるしかないだろう。

ミズオは叫んだ。

「ジョー！ スキルの強化だ！ どっちもだ！」

『では8pいただきますね。強化シークエンスを開始します。5…4…』

「早く…！」

馬の足は速いが、まだ距離がある。余裕で間に合うはずだ。

そう思っていたのだが、見える馬群の後ろにいた一団を見て、ミズオは顔から血の気が引くのを感じた。

また馬群だ。しかもまたケンタウロスと牛男のセット。今度はどちらも灰色で、どちらも引き絞った弓に矢を番えており、今まさに撃ちださんとしていた。

牛男が手を離し、三本の矢が放たれる。前を走る馬群の隙間を抜けまっすぐに飛んでくる。

「チクショウが！」

一秒とかからずに到達した矢から、ミズオは転がるように逃げだした。その先で、さらに矢が飛来する音を聞いた。

灰色馬男どもが矢を放ったのだ。明らかに、牛男の矢よりも速かった。

「ぐぐぐ…ぬん！」

スキルを発動する。真剣白羽取りだ。
意識が集中し、世界が白と黒になる。

一直線に飛んでくる矢が、ゆっくりに見える。白黒の中、滑るように動く手で、眼球に突き刺さろうとする矢を顔の一センチ前でつかみ取る。スキルの流れで蹴りが出て、胴体に刺さろうとしていた矢を弾き飛ばした。

もう一本の矢は、掠るコースだったので無視だ。

「ぜはあ…！」

集中を解いた途端、ものすごい疲労感に襲われる。顔の横を風を切って、矢が飛んでいき、鼓膜が痺れた。掠った耳たぶが少し決れる。

痛みに顔をしかめつつ手の中で矢を握りつぶすのと、強化シークエンスが終わるのは同時だった。

『「飛翔脚」は「紅蓮飛翔脚」に、「真剣白羽取り金的」は「回し受け金的」に変化しました』

（ちよ、ちよっと待て！ それは使えるのか！？）

いや、使える使えないではない、使いこなして見せなければ生き残れない。

脳裏でスキルが嵌る音がする。馬群はもうすぐそこまで迫っていた。馬男の背から、牛男が跳びあがり、両手で斧を振り上げて――

『獲得ボーナスとして、耐炎属性強化と集中力強化が起きました』

ギィィィィ……と世界が音を立てて遅くなったようだった。否、ミズオの集中が世界の流れに逆らっているのだ。視野が極端に広くなり、細部まで認識できる。

砂が舞い上がる様子すら、ミズオの目は拾い上げている。

前から3本の剣が、上から3本の斧が、そして見えてはいないが、後ろから奇襲部隊、あの青い牛男が3体、ナイフを逆さに持って飛びかかってきている。影が見えているのだ。

(どんだけピンチなんだよ！ ふざけんな！)

胸中で叫びつつ、ミズオは動いた。

一番近いのは、前の長剣三本だ。ゆっくりと進んで来るそれに、円を描くように動いた腕が添えられる。

即座に腕は動く。刺突を逸らし、連動して足が跳ね上がった。足と腕の筋肉が悲鳴を上げた。

ズボォ！

跳ね上げられ足が、馬の体に突き刺さる。恐ろしい威力。盾を構えて防御していたその盾を蹴り碎き、さら馬男の下腹部まで突き刺さる。素足でやることじゃない。つま先がいられるかと思ったが何とか無事だった。だが、骨にひびくくらいは入っているかも。

内臓が潰れて赤黒い液体が飛び散った。馬男は苦悶の表情で崩れ落ちていく。

倒れようとする馬男が手放し、ゆっくりと舞う白銀の長剣に、目を血走らせて必死の形相のミズオの顔が映る。

（すごいツラだな！ 頭が痛くて鼻血が出そうだぜ！）

もう一つのスキルを発動した。もう上からと後ろからの刃が、頭と背中に突き刺さる寸前だ。

（おらああああああッ！）

ありったけの力を足に込める。足の裏の血液が沸騰し、爆発した。

————ドォン！

砲弾のようにミズオの体は前へと突っ込んだ。無茶苦茶に転がり、地面を跳ね、足の裏から爆煙と共に、血が迸る。

（このクソスキルめ！ 痛すぎるだろ！ でも逃げれた！ ありがとう！）

ゴロゴロとミズオが転がったところは、矢を番えていた牛男と馬男たちの後ろ側だった。集中が途切れて、頭痛がやばい。頭を抱えてうずくまりたい衝動を振り払い、慌ててこちらに振り返ろうとする牛男の背に向かって、ミズオは飛びかかった。

（うおおおおおおおッ！）

しかし、ミズオは飛来する投槍によって、その身を吹き飛ばされる。

また無茶苦茶に転がって、ミズオが作り上げた破壊跡の端まで行き、樹に当たって止まった。

（うがぎぎいてえええ…！）

太ももを貫通している短槍は骨を砕いている。もう痛いなんてもんじゃない。しかしライダーキック後の方が痛かったよな気がする。まだ耐えられる。

（いったいなんだよ！ もうくんなよ！）

ミズオは痛みにキレつつ投槍が飛んできた方向を見た。

青い肌をしたケンタウロスが三匹、風のような速度で、迫っているところだった。

そのうち二匹の手は新たな投槍を構えており——そして足を押さえているミズオに、投じられた。

第七話 いっぱい来るんだ…（後書き）

はいまたピンチです。すいません。

読んでくれている人が飽きてこないか心配です。

第八話 猿が見えない

投槍に吹っ飛ばされる最中、ミズオは深く反省していた。

（なんでもそこで牛男に飛びかかった！ 多勢が相手なんだぞ！？
逃げなくてどうする！）

足に突き刺さった投槍のおかげで血が出て、血の上った頭が冷えたのかもしれない。

転がった先はミズオがライダーキック—（偽）で作った破壊の道の端っこだ。

木に当たって止まったミズオは、自分めがけて飛んでくる投槍を目に見据える。

（冷静でいれば…さっきの槍なんて簡単に捌けた）

す、と右腕を、円を描くように動かす。二本の投槍は巻き取られ、がしゃん、と地面へ落ちた。

ミズオは冷静だった。冷静に、これ以上なく集中していた。世界はゆっくりと進み、後ろから迫っている牛男たちにも、横から飛んできている矢も、全て把握していた。

（逃げる先は空しかない…！）

スキルを発動すると、カッとする足の裏の血液が熱を持つ。瞬く間に

沸騰し、ガスが充満する。一瞬、こぶのように膨れた足の裏はついに破け、中で圧縮されていた気体が、外へと飛び出す。爆発的な推進力だ。飛び散る血液が足を彩り「紅蓮脚」の名に恥じぬ外観となる。

（つか、やっばいてええええええええええ！）

ミズオは激痛を感じつつ、爆発の圧によって高く上空へと放り出された。この間ほんの瞬き程の間である。牛男はミズオを見失い、馬男たちだけが、目だけでミズオの軌跡を追うことができていた。

（よし、これで最後だ！ 痛いけど……もう一回、紅蓮脚！）

——————パァン！

今度は両足の裏が弾け飛ぶ。超痛い。涙と鼻水が止まらない。汚い顔をしたミズオは恐ろしい勢いで、飛んで行った。

向かう先は、占拠されているというセーブルームだ。ここ以外に、この世界で安全な場所を、ミズオは知らなかった。

空中を飛ぶ最中に、ミズオは決心をした。スキルをもう一段強化する決心だ。今度かかるポイントは8ポイント。とても高い。

しかし、「回し受け金的」と「紅蓮脚」では遠距離を攻撃するのに不便である。というか紅蓮脚の使い勝手が悪い。激痛を我慢するのはもう嫌なのだ。

「紅蓮脚を強化してくれ！」

『29 pの内、8 pを消費します。よろしいですか？』

「ああ、さっさとやってくれ！」

『強化したスキルの発動に推奨される筋力を持っていませんが、よろしいですか？』

「なに？」

ミズオの高度が落ちてきた。もうセーブルームが見える。セーブルームの扉は開いていた。扉の前に赤い牛男。屋根に立っている灰色の牛男。

二匹の牛男が見えた。灰色が空中で落下中のミズオに矢を放ってくる。届くのは一秒以下。回し受けで捌く。

（推奨筋力とかあったのか？ 筋力強化4回で足りないってどういうことだ。いや、まアいい！ 回し受けだけでやってやる！）

「ブモオオオオオオオ！」

赤い牛男が跳び上がり、斧をしたから振り上げてくる。それに先んじて飛来する矢。どちらかに対応すればもう反対側で死ぬということだろうが、ミズオには「回し受け金的」があるのだ。

「はあっ！」

回転させる腕に巻き込み、矢の軌道を捻じ曲げる。同時にミズオ

の足が恐ろしい勢いで振り上げられた。その威力、牛男が振り上げてきた斧を碎き、ついでに牛男の頭をサッカーボールのように蹴飛ばすほど。

牛男の頭が千切れて飛び、セーブルームの屋根に跳ねて落ちていく。赤い肌の死体がクルクルと回転し地面に落ちた。空中で上手く体を操作してくると回ったミズオがその上に着地する。足の下で、肉体が潰れた。

（ラッキーだ！ 降りるときは足が折れることも覚悟していた！）

そしてすぐに前に飛び込み前転をかける。地面に倒れ伏す顔なし死体に、屋根の上から矢が突き立った。

回転しながらセーブルームに入り、扉を閉める。

「……。」

カチリ、と後ろ手に鍵をかけつつミズオは室内を睨みつける。中心に一匹の猿が胡坐をかいて座っていた。

猿は顔のあたりだけで、革と金属でできた防具を着込んだ2メートルほどの人型だった。恐らく魔王軍兵士。

（牛男、馬男、と来て次は猿男かよ）

頬が引きつる。ミズオを見据え、猿男はゆったりと立ち上がった。その所作一つ一つに内包する力強さが、ますますミズオの頬を引きつらせた。

かなり強い。この状況、鍵をかけはしたが閉じ込められたのはミズオかもしれない。

「この部屋は何だ？」

猿男が明瞭な言葉で喋った。低い、海鳴りのような声だった。

（まあ喋ることもあるだろう）

猿男の顔が理知的だったので、驚くより前に納得してしまった。
むしろ喋らないと違和感があるような気もする。

「俺にも分からない」

ミズオは正直に答えた。猿男は眉をしかめる。

「ふざけているのか本気で言っているのか。まあいい。ここは聖地の中心だ。即刻この奇妙な部屋を退けろ。大体いつの間に建てた」
「分からないんだよ。俺が教えて欲しいくらいだ」
「そうか。もういい。貴様との話し合いは無益だ」

猿男は憂鬱そうに息を吐いて、目を瞑った。その動作に一瞬ミズオも気を抜いた。気を抜いてしまった。

「死ね」

その声は驚くほど近くで聞こえた。目と鼻の先に猿男の拳があった。でかい。そう思った時にはミズオは首がもげそうなほどの衝撃を受けていた。次いで花が潰れていることに気づく。灼熱のように顔が熱い。脳が揺れてぐらぐらしている

筋力か骨の強化が一段階足りていなければ、死んでいたと思われる威力のパンチだった。

（は…速すぎる…っ！）

殴られて後頭部が扉にぶつかる前に、猿男の右回し蹴りがミズオのあばらを蹴り折った。蹴られたことを知ったのは、右肩から壁にぶつかった時だ。

「丈夫な奴だ。硬い骨をしているな」

猿男の動きは全く見えない。いつの間にか首を掴まれ、壁へと押し付けられていた。

ミシミシと首が閉まる。

（死……んでたまるか！）

これはとてもいい位置だ。まるでスキルを発動するためにあるような。ミズオは全力でスキルを発動する。

—————回し受け金的！

この動作だけは、猿男の動きに追い付いているはずだ。そう思わなければやってられない。

首を掴む腕を払いのけ、蹴りを出す。ボツと空気を裂いて、足が猿男の顎へと迫る。

（当たれ———！）

だが腕を払おうとした手は、岩に当たったかのように弾かれ、ほとんどタイミングのズレなく放った筈の蹴りはむなく空を切った。猿は既に部屋の反対側まで後退していた。まるでコマ落としの映像を見ているようだ。最大限集中しているのに、過程が全然見えな

い。

「急に速くなった。まだ対応できる。だが、何か仕掛けがあるのか？ 近づくのは危ないか？」

自問する猿男を睨みつつ、ミズオは必死に息を吸った。まずい、このままでは死ぬ。

（どうすればいい？ どうすればこの窮地を逃れられる？）

ミズオは必死に考える。スキルを得るか？ どうやって。指で操作して？ この猿男が見落とすか？ いや後ろ手でやれば行ける――――。

そう思った瞬間、ミズオの額にクナイが突き刺さっていた。硬い骨を貫通して、脳を突き破り、後頭部を爆散させながら小屋の壁に当たって跳ね返る。

「王から頂いた武器は汚したくなかったが、仕方ないな」

即死の筈なのに、なぜかそのセリフは聞こえた。



『上級兵と一般兵を倒したので＋11P リセットにより－5Pで
す』

目が覚めた。

「死んじまったか……はあ。」

起き上がり、ため息をつく。

あそこまで差があるとは。どうやったら勝てるのだ。腕を払おう
とした時のあの絶望的な硬さ。筋肉とは思えない。全身金属ででき
ているんじゃないだろうか。

試しに勝つために必要そうな強化項目を挙げて見る。

（視力：動体視力は必須だ。できれば二段階以上は欲しい。視力に
追いつけるだけの思考能力、動きに反映できるだけの神経速度、ダ
メージを与えられるだけの筋力は……6段階？ 7段階？ どれだ
けいるのか分からないな……）

考えることは他にもある。このセーブルームが立っている場所は
聖域の真ん中だと猿男は言っていた。

このセーブルームを誰が何のために作ったのか。

「おいジョー」

『なんでしようか』

「この世界ってなんなんだ？ ゲームか？」

『後者はミズオさんが探るべきことで、前者は社会情勢の情報に該当します。3ポイント支払いますか？』

「……払わん」

ミズオは舌打ちをして、寝台へと寝転がった。

この世界のこと、猿の言った言葉、水の精霊が言った言葉。王…？ 魔王が死んだと言っていたか？ では大魔王とは何だ…？

ぐるぐると頭の中を益体も無い考えが回る。

しかし結局答えは出ず、いつの間にか考えているのはあの猿男をどう倒すかということだった。

これらの結論は一つだ。自分を強化をして、スキルを使うしかない。

「ジョー、武器と防具を2ポイントで取得できたよな？」

『はい。取得しますか？』

「ああ、くれ」

『取得します。残りポイントは39ポイントになります』

ごとんと落ちた防具は靴だ。鉛製の重そうな物。そして武器は剣だった。馬男の持っていた白銀の物とは比べるのも恥ずかしい、鈍らに見える。

だが、スキルを得るために使用するのだ。別にこれでも構わない。

深く息を吸い、長く長く、息を吐いた。

「やるか」

ミズオは立ち上がり、剣を頭上に構えて、振り下ろした。

すぐにスキルを得た。

「素振りチャージ」という名の、面白い効果のスキルだ。

なんと素振りをすれば剣を伸ばせるようになるらしい。振った数×10センチ。一回伸ばせば、振った数はリセットされる。

伸びるスピードはとても速く、伸びきるまでの時間は伸ばす距離にほとんど影響されなかった。

（これを使えば、案外簡単に森を脱出できたりしてな）

先端を固定して、柄を持った自分ごと森の外まで伸ばせばいい。そんなにうまく行くとも思えないが、試してみるのも良いだろう。

「そうさ」

別に猿男を倒すのが目的ではないのだ。今の目標は森からの脱出。まずはそれに焦点を絞ろう。

ボーナスは筋力アップだった。これ幸いと、素振りのスピードを

上げ、回数を重ねていく。

「よく考えたら1キロ移動するのに1万回素振りが必要だった。さすがに無理だ」

3百くらいまでやったところで力尽き、床へ大の字になって寝転んだ。スキルを強化した方がいいかもしれない。

仰向けに寝転ぶミズオの前に画面が展開される。

『新しいスキルが出ていますが、お聞きになりますか？』

なぜか勿体づけているが突っ込む気力も無いのでスルーである。

「おう、お聞きになるよ」

『これは酷いスキルなのです…。お聞きになると「これは酷い」とおおっしゃるにちがいありません』

「おいハードル上がってるぞ？ 大丈夫か？」

『それでは、お教えいたしましょう！ これが新しいスキルです』

ババーン、と口で言いながらジョーはスキルを見せてきた。

『「汗まみれ大車輪」…汗をかいている時だけ発動可能。音速で側転する。空気の衝撃などは耐えなければならない。だからとても痛い。でも側転なので速度は遅い。それと汗臭い』

（なんだこれ……）

「それと汗臭い」じゃねえよ。これジョーが今くつつけたんじゃないやねえだろうな。

左手首にはまっついていて汗臭さに苦しんでるのだろうか。

『ボーナスは動体視力強化と三半規管強化です。なんと二つ一辺に！』

「それはいいな。いいけどスキル事態がウンコだな」

『音速はすごいじゃないですか。攻撃に使っては？』

「俺の体がバラバラになるわ！」

つい疲れているのに叫んでしまった。余計疲れた。

だるーん、と寝転がるミズオの前にさらに画面が展開される。

『実はもう一つありまして』

「まだあんのかよ…」

『これです』

『「疲労困憊防御」…疲労困憊している時にのみ発動可能。打撃をくらっても全て受け流せる。でも動けないし攻撃もできない。切られると普通に痛い』

「……………何のためにあるんだ？」

『ネタスキルシリーズでございます』

「クソいらねえ……」

『むしろボーナスが本体という感じですからな。今回のボーナスは柔軟性強化と新陳代謝強化です』

「ボーナスは凄いい使えるんだが……………なんだかなあ…」

しかし代謝が上がったお陰だろうか、体の疲労はすぐに回復し、ミズオはまた素振りに戻る。ポイントを一つ払って、1日分の少量と水を取得し、さらに素振りを続ける。

そしてついに千回振り切ってミズオはまた倒れた。疲労の極致だ。

『スキルが出ました』

また目の前に画面が出た。

「おう……またネタか？」

『ガチ、でございます』

「マジか」

『「超疲労困憊防御」..もう一步も動けないという時に勝手に発動する。体が銅像になって無敵になる。銅像になると心臓も止まるのですぐ死ぬ』

「どうみてもネタじゃねえか！」

『ガチでネタ、でしたな』

「こ、この野郎……！」

『ボーナスは筋力と骨格強化です』

「お、おう……。ボーナスだけは良いなあホント……」

その後も素振りしたりネタに怒鳴ったり飯を食ったりしながらダ

ラダラ過ごし、その日一日を終えた。

疲れていたのですごくよく眠れた。

セーブルームが無敵で無くなる72時間後まで、こんな感じでダラダラ過ごすのもいいなあ、とミズオは思うのだった。

第八話 猿が見えない（後書き）

11／13 ポイントが間違っていたので修正

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2819y/>

異世界はゲームのようだった

2011年11月16日20時32分発行